
超能力は、好きですか？

ありすきゃろる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超能力は、好きですか？

【Nコード】

N2579S

【作者名】

ありすきやるる

【あらすじ】

超能力が科学的に開発できるようになって数十年。実験は最終段階、社会実験に突入した。これは、実験都市と呼ばれる場所で生活する人たちのお話。

1・背景

10年程前の事だ。

とある科学者が、超能力を発見した。超能力を発見したというより、超能力者を生み出す方法を発見した。というのが正しいのかもしれないが。

詳しい理論や理屈は僕には理解出来なかった。しかしその方法は馬鹿な僕にも理解出来た。脳のとある部位を三ヶ所。同時に一定の刺激を加えるだけ。つまり、脳を弄れば、超能力者になれるという事らしい。

科学者はその理論や理屈を国のお偉いさんに発表し、実際にその方法で生み出した超能力者を見せたらしい。余談だが、その超能力者はその科学者の娘であり、『初まりの超能力者』という肩書きを手に入れた可哀相な人である。

国のお偉いさんは凄く凄いと喜んだ。新しい資源を手に入れたと思ったのか、それとも超能力とかに夢見た世代の人間だったのかはわからないが、すぐにその科学者に研究費用やらを便宜し、国家プロジェクトとして超能力者の育成に力を入れた。

問題は色々あったらしいが、大きな問題は三つあった。

一つ目は金。何を作るにしても金がいる。しかしこれは国が協力するという事で解決したらしい。

二つ目は危険性。超能力者は危険なのではなからうか。今の社会に適応出来るのかどうかという問題。この問題は、実験して、経過をみるしかないという結論に達したらしい。危険性よりも、やはり利益を取ったという事なのかもしれない。

そして最後の問題は、被験者。今まで夢物語とされていた超能力が手に入ると言われても、信じられない人も多数。脳を弄るといふのに恐怖を覚える人も多数。実際、これは危険性にも含まれるが、失敗も多かったらしい。失敗には、超能力が発現しないか、死ぬか

の二通りあった。発現しただけならいいが、死にたくはないよねという事で、被験者が全く集まらなかったらしい。

というわけで、金に物を言わせる事にした。被験者になったものには多額の金をプレゼント。被験者を出した家庭にも多額の金をプレゼント。金、金、金のオンパレード。その結果、結構な被験者が集まったというのはなんとというか金さすが、というべきか。集まった被験者に子供が多かったのはなんとというか金怖い、というべきか。集まった被験者の脳を弄くり、失敗して生きていた人には金を渡してお帰り頂き、失敗して死んだ人には金と一緒にお帰り頂き、成功した人には金と共に実験施設にご案内したらしい。この成功したグループの人達の事を、第一世代と呼ぶらしい。

そのような事を数十回繰り返し、10年後。

実験は最終段階。社会実験に突入しているらしい。国がとある場所を買い取り、そこを実験場にした。いわゆる、実験都市と呼ばれる場所の誕生である。

そして僕は、いわゆる第十一世代と呼ばれる人間らしい。

2・友人（強制睡眠）

「起きろー、目覚めろー、起きる時間だよー」

そんな声と共に、頭を叩かれているような気がした。目を覚ます。歴史を見ていた気がするが、もう忘れてしまった。夢なんてそんなもんらしい。

「おっ、起きた起きた。もしかして、起こす能力も手に入れちゃったのかしら。私、天才じゃん」

「ふぁ……」

いや、僕が勝手に起きただけだと思うよ。と、言おうと思ったがあくびが出たのでやめておいた。

あくびをしたら、今の状況を思い出してきた。今僕がいる場所は高校のある教室。クラスメイトは一人を除いてすでにいない。たぶん放課後だろう。午後の授業の記憶は皆無なので、長い時間寝ていたいようだ。

「七海さん、僕が起きるの待ってたの？」

「仕方なくね」

七海さんは肩を竦めた。照れているようには見えないので、ホントに仕方なく待っていたようだ。

「だってさー、先生が、お前が責任を持って連れて帰っていうんだもん。酷いと思わない？私、見たいテレビあったのにさー」

快活なイメージがある七海さんの膨れっ面は、なかなかカワイイと思った。もちろん口には出さないが。

「思わないよ。七海さんが失敗したのがいけないんでしょ？僕、被害者。あなた、加害者」

「あーあー、聞こえないよー。さっ、帰りますよー」

七海さんは、古典的な聞く耳を持たないという行動をとりながら、教室から出ていった。

僕は鞆を持って、七海さんのポニーテールの後を追った。ん、ポ

ニ―テールの七海さんの後を追ったが、正しいのかもしれない。まあ、いいか。

実験都市という名前だが、町自体は至って普通。車が走り、電車が通る。学校もあるし、ファミレスもある。アパートもあれば、会社もある。警察署もあるし消防署もある。違うのは超能力者が多く住んでいるという事と、監視カメラが多いくらいか。

「加減が難しいわけなの。どうすればいいのかな？」

「僕に聞かれてもわからないよ」

七海さんとは途中まで帰り道が一緒だ。とはいえ、いつも一緒に帰るわけではない。一週間に一、二度、たまにこうやって、他愛もない会話をして帰る事がある程度。友達って奴だ。

「私としてはね。相手の問題なんじゃないかなと思うんだけど。相手に下地があるかどうか」

「つまり僕のせいって事？」

「うん。つまり私は悪くない！」

七海さんは、郵便ポストに設置されていた監視カメラに訴えた。その向こうにいるであろう研究者に届くといいね。と、テキストに応援しておいた。

と。

「ん？」

「どしたの佐藤君？」

「あれ」

僕は今まさに通り過ぎようとした路地裏の奥を指差した。そこには大柄な、後ろ姿だけでヤンキーとわかるような二人組と、小柄な見ただけで気が弱そうとわかるようなサラリーマンがいた。

「親父狩り？」

「だね」

七海さんの言った通り、ヤンキー二人組がサラリーマンから小遣いを頂戴しようとしているようだ。

サラリーマンのあの怯えようを見る限り、サラリーマンは超能力が使えないらしい。ヤンキー達の方は何とも言えないが、ヤンキーの一人の手には何故か歯ブラシが握られている所を見ると、もしかしたら超能力者かもしれない。

「どうする？」

七海さんに僕は問う。ひ弱な僕には助ける事が出来ないからだ。七海さんも無理ならば、携帯で警察に連絡するしかない。

「んー……」

七海さんはポニーテールを触りながら思案顔。考え事をする時、ポニーテールを触るのは七海さんの癖だ。

「あの二人、友達かな？」

考え終わったのか、七海さんはポニーテールを触るのをやめた。そして、ヤンキー達を指差し、僕に笑みを向けた。

悪戯を思いついたかのような、子供っぽい笑みだ。

「多分そうじゃないかな」

あんな事をするくらいだから、もしかしたら親友レベルかもしれない。

「だよね。私もそう思う。そう、思える！おいこらその古典的不良……」

七海さんが声を張り上げる。ヤンキー達を指差したまま。

「ああん？」

「何じゃてめえ？」

ヤンキー達はサラリーマンから目を離し、こっちを見る。七海さんを、見る。

「おやすみなさい……」

そして七海さんのその言葉を合図と共に、ヤンキー達は倒れた。「よっしゃー！」

七海さんはガッツポーズをしてから、倒れたヤンキー達に駆け寄

っていく。

僕はポニーテールの後を追う。

「よし。うまくいつてる。さすが私」

「大丈夫でしたか？」

ヤンキー達を蹴っ飛ばしながら自画自賛している七海さんを尻目に、僕は状況についていけず呆然としているサラリーマンに声をかけた。

「あ、ああ、すまない。大丈夫だ」

「そうですか。それはよかったです」

「あー……これは、君達がやったのか？というか、彼らは死んだのか？」

「ごもつともな疑問だ。ヤンキー達の倒れ方は尋常ではなかった。受け身すらとらず、倒れ伏したのだから。」

「僕ではなく彼女が。大丈夫です。寝てるだけですから」

「寝てるだけ？そういえばさっき彼女は……催眠系？対象を強制的に眠らせる能力か？条件は、聞こえた者？いや、違うか。それなら私も寝ている……危険レベルは？あつ、いや、すまない」

自分の世界に没入し始めたいたサラリーマンは、慌てて僕に謝罪した。別に謝罪する事でもないと思うが。

「いえ、構いませんよ。お詳しいんですね」

「い、いや、まあね」

実験都市に住んでいる者は、およそ四種類に分けられる。超能力者、超能力者になれなかった者、超能力者の家族、研究者の四種類だ。恐らくサラリーマンは超能力者ではない。そして僕の言葉だけで、催眠系という言葉が出たり、条件や危険レベルを考えたこのサラリーマンは、超能力者になれなかった者のようだ。

同情に値する。未練があるのだろう。僕と七海さんを見る目に、羨望の色がある。

「これ、何時間くらいかな？」

七海さんがヤンキーの頭を叩きながら、僕に聞いてきた。いや、

僕に聞かれても。

「何時間くらい？寝てる時間かい？自分ではわからないのか？」

能力に興味があるのか、サラリーマンが食いついてきた。目が輝いている。超能力世代なのかもしれない。

「え？あー、一時間って事にしましたけど、私まだ、時間設定苦手です」

七海さんは照れ気味だ。照れる事ではないだろうと思う。

「まあ、長くても三時間ですね。はい」

ちなみに僕も三時間程度寝ていた。午後の授業一発目で、能力の実験台になった。あの時も一時間にするからと言っていた。昔聞いた時、最大八時間眠らせる事が出来ると豪語していた事を思い出す。規則正しい生活に便利だな。と思った。

「七海さん、そろそろ行こうよ」

サラリーマンと能力の話で盛り上がっているところ悪いが、ただでさえいつもより帰るのが遅くなっているのだ。そろそろ帰りたい。「あつ、ああすまない。まだお礼を言ってなかったね。助けてくれてありがとう」

このサラリーマン、一つの事に集中すると、ダメになる人のようだ。ヤンキーに絡まれたのもそれが原因と思われる。

「いえいえ、私も実験出来てラッキーでしたから」

「彼らは、どうする？警察を呼ぶ気は私にはないが……」
優しいサラリーマンだ。

「私達にもないよね。ほつといっても問題なくない？」
「だね」

風邪を引くかもしれないし、財布を取られたりするかもしれないが、問題ないだろう。

「そうだな。ほっておこう」

サラリーマンも、そこまで優しくはないらしい。

「じゃ、おじさん。気をつけてねー」

「ああ、ありがとう」

にこやかにおじさんと呼ばれたのがおかしかったのか、苦笑しながらサラリーマンは去っていった。

「僕達も行くよ」

「んー、出来るなら起きるのを確認したいんだけど……」

時間設定が成功したかどうか気になるようだ。しかし、最低一時間、もしかしたら三時間、最高八時間、物影で彼らを観察するのはちょっと遠慮したい。

「明日先生に聞けば教えてくれると思うよ？」

僕は路地裏の入口からこちらを写している監視カメラを指差し、そう教える。

「あつ、ホントだ。じゃ、帰ろっか」

七海さんはそう言っつて、ヤンキー達をもう一蹴りしてから、歩き出した。

七海さんの能力で寝た場合、起きるべき時間になるまでは何があっても起きないので、僕も七海さんに習って一発蹴っておこうかとも思ったが、やっぱりやめておく事にした。後が怖いから。

「チキンだなー」

そんな僕を見て、七海さんはそう言っつて笑う。チキンとは心外だな。

「寝ている相手を蹴るなんて、そんな非人道的な事、僕にはとても出来ませんよ」

「遠回しに私の事、人間じゃねえって言っつてない？眠らしてあげましょうかー？寝ている間にあんな事やこんな事してやろっかー？」

七海さんなら、やりかねない。

「謝るなら今のうちだよ？」

「ごめんなさい。七海さんはとても美しい立派な女性でした。非人道的ではありません。申し訳ありませんでした。美しい七海さんお許し下さい」

だから僕は早々に謝った。ついでに媚びを売っておいた。

「美しいって、もうやだぁー！」

七海さんは照れたのか、今度は僕の背中を叩いてきた。僕の住むマンションまではもう少し。もう少しの我慢だ。

我慢ついでに思い出す。七海さんの能力を。

春日七海（１７）

能力系統は催眠。

能力名は強制睡眠。

能力発動条件は、対象が友人である事。対象を指差す事。対象が自分を見ている事。対象に『おやすみなさい』と伝える事の、計四つ。

睡眠時間は、最大八時間。本人の意思である程度コントロール可能。発動条件の『友人』を、どう判断しているかは不明。対象が一人の場合は、本人と『友人』でなければならない。対象が複数の場合は、対象同士が『友達』ならば、本人が対象を知らなくても問題ない。

社会適応難易度は四。社会に適応出来る難易度を五段階で表す項目だが、能力が強ければ高くなる傾向にある。その為、危険レベルとも呼ばれている。強制的に副作用無しで相手を眠らせる能力は、医療現場において有益。発動条件も難しい。しかし本人のパーソナリティ（不良とはいえ、無防備な相手を蹴つとばしたり、能力を使うのを楽しんでいるパーソナリティ）、発動条件にも不明な部分がある為（最も発動条件を厳しくしている『友人』を、七海さんの主観で判断しているとしたら、彼女はほぼ制限無しで人を眠らす事が出来る）危険レベルは四。という事になっているらしい。

備考としては、彼女と友人になるという事は彼女にいつでも眠らされてしまうという事に他ならない。その為、友人は少ないらしい。「美しいだなんてそんな困るってばどうすんのよ私これ告白と同じじゃないの？もうやだ佐藤君ってばー！」

しかし友人をやっている僕から言わせてもらえば、七海さんに友

達が少ないのは、この性格に問題があると思う。

ああ、背中が痛い。

3・家族（読心術）

「ただいま」

背中がヒリヒリするが、なんとか無事家についた。リビングは暗い。明かりを点け、空気を吸い込む。我が家に帰ってきた気がする。

「おかえりお兄ちゃん」

僕が安堵感に包まれていると、部屋からパジャマ姿の菜月が現れた。ちなみに現在時刻は18時。寝るにはまだ早い。なのになぜパジャマ姿なのかというと、この妹は一日中パジャマなのだ。嘆かわしい。

「お兄ちゃんが嘆く事はないと思うけど」

菜月はいくびをしながら、髪をかく。せつかくの長くて綺麗な黒髪も、寝癖でボサボサ。台なしだ。

「綺麗って事には感謝するけど、台なしは余計だよお兄ちゃん。こういうのも味があるんじゃない？」

「僕には理解出来ない味だよ」

引きこもり妹の将来が兄は心配だ。

「妹としてはお兄ちゃんの将来が心配だけだね」

「……夕食、何食べたい？」

「お兄ちゃん特性オムライス」

「了解」

カワイイ妹の為に頑張る事にしよう。

「そうそう。カワイイ妹の為に頑張rinaさい」

「……」

偉そうな妹だ。しかしその、ニコニコとした笑顔の前では文句を言う気にはなれない。

僕は菜月に甘い気がする。

「そんなお兄ちゃんが、私は好きだよ？キスしてあげよっか」

妹の戯言を聞き流しながら、僕は夕食を作り始める事にした。

「いただきます」

「いただきます」

オムライスを手早く作り、菜月と二人っきりの夕食を始める。

両親はいない。菜月が第十一世代に志願し、僕が菜月の泣き落としにあい渋々従った結果、両親の元には莫大な金が入った。一緒にこの実験都市に住めばさらに金が貰えたのだが、両親はもう金はいらなかったようだ。

というわけで、2LDKのこの部屋で、僕と菜月は二人暮らし。学生の身分としては良すぎる広さの部屋だが、家賃は零円なので家賃の心配はいらない。監視カメラがトイレと風呂以外には設置されているこの部屋を、僕は大変気に入っている。

「私は気に入ってないよお兄ちゃん」

「……」

時に兄は妹の意見を聞き流す事も重要だと信じている。

「そんなの信じなくてもいいよお兄ちゃん。兄は妹を無視しちゃダメだよ」

「食事中はお静かに」

「お兄ちゃんこそ静かにしてよね」

僕は一言も喋っていない。これだからテレパスは嫌だ。気持ち悪い。

「気持ち悪いなんて酷いよお兄ちゃん。私、悲しい。悲しくて悲しくて、お兄ちゃんの秘密をネットではらまきなくなっちゃった」

この重度の引きこもりならやりかねない。クスクスと笑う菜月の姿は、小悪魔に見える。

「すいませんでした菜月様。僕が悪かったです。お前は気持ち悪くなどありません。お前は世界で1番力ワイイカワイイ妹です。気持ち

「悪いわけがない。逆に気持ちいいです」

だから僕は早々に謝罪した。ついでに媚びを売っておいた。

「気持ちいいって、やだお兄ちゃん。卑猥だよ」

僕の考えている事が読める菜月なら、僕が本心ではなく媚びを売った事に気付いているはずなのだが、何だか嬉しそうだ。嬉しそうに卑猥と言うのも何かおかしな話だが。まあ、よしとしよう。

ケチャップを口元につけたまま、くねくねと何か妄想している菜月を見ながら、なんとなく彼女の能力を思い出してみる。

佐藤菜月（15）

能力系統は最も多い精神感応系。ちなみに次に多いのが七海さんの能力、催眠系。その次が身体能力強化らしい。

能力名はテレパス。つまり読心術。

能力発動条件は無し。

社会適応難易度は五。精神感応系事態は最も多く、能力自体の危険度は低い。社会にとっても色々利益はあると思われる。しかしプライバシーの問題により、社会がその存在を許容出来るかの問題がある。とはいえ、本来ならパーソナリティに問題がある場合でも三が妥当。菜月が五の理由はパーソナリティの問題ではなく、発動条件が無い事にある。

発動条件が無い超能力者は本来いない。何かしらの発動条件が、確実にある。例えば他の精神感応系の場合、相手の名前と誕生日を知っている事。相手の体の一部に触れる事などがポピュラーである。なぜ超能力を使うのに条件、一定の手順を踏まないとけないのか。一説によると、脳に負荷がかからないようにとか。一定の手順を脳で踏む事により、認識する事により、発動出来るのだとか。大き過ぎる力を抑える為とか。色々言われているが、僕には何が正しいかはわからないし、どうでもいいと思っているので、詳しい事は知らない。

しかし稀に、条件が無い、制限が無い超能力者が生まれる。菜月のように。その理屈は不明。突然変異扱いだ。

条件が無い超能力者は、いつでも超能力が使える。というわけではなく、いつも超能力が発動している状態にあるらしい。その為、研究者の中には条件が無いのではなく常時条件をクリア（例えば心臓が動くだけで、酸素を吸うだけで等）しているのではないかという仮説を出す者もいるらしい。まあ理屈はどうでもいいが、菜月にはいつも人の心が流れ込んで来るという事だ。それが社会適応難易度五の理由。歩くプライバシー侵害者なのだ。

条件が無い、制限が無い超能力者は悲惨な末路を辿る事が多いらしい。例えば、炎を自在に操る能力、パイロキネシス者の場合は回りを無差別に焼き最終的に焼死。テレポーターは死ぬまでどこかをさ迷って、テレキネシスはただの迷惑さん。七海さんの能力の場合、どうなるのだろう。目があつた瞬間相手を眠らせるのかもしれない。

では、菜月のような精神感応系はどうなるか。ずばり引きこもりになる。

『引きこもりじゃないよ。避難してるんだよ。人の汚い心から』

と、菜月は言うがそういう人間の事を世間では引きこもりというのだ。

常時人の考えが読める（菜月の場合は聞こえるらしい）為、外出するのが嫌になるらしい。常時耳元で知らない人間に囁かれたら、そりゃ嫌にもなるし心も病むし体に支障もきたすだろう。なので僕も、無理に菜月を外に連れ出そうとはしない。

『理解あるお兄ちゃんてよかった。ホント、よかった』

と、泣きながら感謝されたが、泣く程の事でもないだろと思った。その後、僕が気を使って別々の場所に住もうかと提案したら、泣きながら怒られた。怒るのか泣くのかどっちかにしなさいと思った。

幸い菜月の超能力範囲は、『視界に入った者』らしいので、部屋に引きこもつてれば問題ないらしい。地獄耳の場合は引きこもつても聞こえてくるらしく、たいいてい地獄耳の条件無し超能力者は、自殺するらしい。ご愁傷様だ。

「そついえばお兄ちゃん。今日帰ってくるの遅かったね。何してたの？」

菜月がくねくねをやめ、妄想から帰ってきたようだ。

「ああ、授業中に寝ちゃったね。起きたら授業が終わっててビックリした。誰も起こしてくれなかったみたいでさ。急いで帰って来ただけど、いつもより遅くなったよ。ごめんな」

僕は菜月の問いに七海さんの情報を隠しながら言う。菜月の能力は表層意識しか読み取れないし、過去視というわけでもないのので、自分の全てを知られるわけではない。上手くやれば秘密を持つ事も出来る。今も恐らく、菜月は七海さんのせいではなく、僕が自然に寝ていただけだと判断し、僕が一人で帰ってきたと思っただろう。

「なるほど、七海さんの能力にやられて、七海さんと一緒に帰ってきたんだ」

つい七海さんの事を考えてしまった。無念。たまには妹に、意図した秘密という物を持ちたいものだ。

「それは無理だよお兄ちゃん」

クスクスと、僕の心を聞きながら菜月は笑う。

「私はお兄ちゃんの全てを知りたいんだからね」

それが可能な能力を、菜月が持っているのはどこか作弄的な気がする。

「作弄的でも何でもいいよ。お兄ちゃん、他に今日何かなかった？」「特にないよ」

何かといえば、帰り道にヤンキーからサラリーマンを助け、七海さんに背中をバシバシ叩かれたりした。

「何それ。もっと詳しく聞かせて？」

「……」

僕はもしかしたら、嘘がつけない人間なのかもしれない。

「心ではね。お兄ちゃん、表情は全然変わらないから、私以外の人には、きつと嘘がわかりづらい人間に見えてると思うよ？よかったね」

「お墨付きありがとう」

「どういたしまして。じゃ、聞かせてくれる？」

ニコニコと笑う妹は、僕を逃がす気はないらしい。

ああ、心が痛む。気がする。

4・友人（勇者）

菜月に洗いざらい聞かれてしまい、『お兄ちゃん、ポニーテールが好きなの？大丈夫？』と、心配されてしまった次の日。一晚考えたが、心配された理由はわからない。別にいいじゃないか、ポニーテールが好きでも。いや、別に好きと認めたわけではないが。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、お兄ちゃんの大好きな妹が大好きなポニーテールをしている気分はどう？いつてきますのキスしたくならない？」

ポニーテールな引きこもり妹の戯言を、無心で無視して「いつてきます」と言い、僕は家を出た。無心無心。

「無心無心つてうるさいよおに」

菜月の嘆きがドアを閉めると聞こえなくなった。防音も完璧だ。五階建ての最上階から、階段を使って下りる程、僕はアクティブな人間ではない。おとなしくエレベーターを使う。

途中で、見知らぬスーツ姿の女性と一緒になった。「おはよう」とフレンドリーに挨拶されたので「おはようございます」と礼儀正しく挨拶した。笑われた。笑う事はないじゃないかと思ったが、気にしない事にした。

一階につき、女性を先に行かせる。

「よお、各務。ちよつと遅かったんじゃない？」

すると、ちらら男に声をかけられた。いつもの事なので驚きはしない。このちらら男は太郎君。同じマンションに住んでいるクラスメート。朝の登校を一緒にする仲だ。

「おはよう太郎君。今日は珍しく、菜月が朝起きててね。いつもより朝が忙しかったんだよ」

日中ずっと家に引きこもり、菜月が何をしているかというところ、寝ているらしい。そして夜は、ネットをしている。夜遅くまでネットをしているので、僕が学校に行く時、菜月が起きている事は稀だ。

『月が見えなくなったら私は眠るんだよ』

と、菜月が言っていた事を思い出す。兄は妹の将来が心配でならない。

「菜月ちゃんが？それは珍しいな。今日は何か珍しい事が起きる予感。楽しみだぜ」

「そうだね」

好戦的な笑みを浮かべる太郎君に水を差すのもあれなので噓をついたが、僕は全然楽しみじゃない。

「そついや各務。昨日あの後どうした？」

歩きながら太郎君がそんな事を聞いてくる。あの後というと、七海さんに眠らされた後という事だろう。

「授業が終わって一時間くらい経ってから起きたよ。で、七海さんと一緒に帰った」

「そうかそうか。それは羨ましいねこの野郎」

太郎君がヘッドバットを繰り出してきた。別に痛くはないが、歩きづらいので「ごめんなさい」と早々に謝る。

「羨ましいなら、太郎君が七海さんの相手になればよかったじゃないか」

太郎君も七海さんと友達なので、条件を満たしている。

「え、やだよ。眠らされるって怖いじゃん」

太郎君はなかなかの正直者だ。七海さんに眠らされるという事は、その間完全に無防備になるという事で、嫌がる人も多い。その為、昨日の能力の授業の相手は僕になったのだ。

「しかも寝ちまったら、自分の能力の練習出来ねえじゃねえか」

確かにその通りだ。しかし。

「先に太郎君が練習して、最後に七海さんってやればよかったんじゃない？」

それで万事解決。

「いやいや。確かにそれなら練習は出来るしカワイイ女子と一緒に帰れるという特典もついてきていた。だがしかし！」

太郎君は天に拳をかけた。秋の空を綺麗だな。と思った。

「そもそも俺は女を殴れねえ！！だから七海とは組む事が出来なかった！！だが後悔はしていねえー！！」

太郎君は高らかにそう宣言した。太郎君の能力を知らなければ、何を言っているかわからないと思う。

僕は自分に酔っている太郎君を横目に見ながら、太郎君の能力をふと思い出「ちよつと待てやこらあ！！」「待たんかポケエ！！」そうとしたが、呼び止められた。

後ろを振り向くと、そこには昨日のヤンキーがいた。ご立腹の様子だ。そしてなぜかヤンキー片割れは（ヤンキーBと呼ぶ事にする）今日も歯ブラシを持っている。どんな能力なんだろう。

「昨日はよくもやってくれたなこらあ！！」

「三倍返しが基本だぞポケエ！！」

どうも昨日の仕返しに来たらしい。しかしお門違いだ。僕は何もしていない。眠らせたのも、蹴っ飛ばしたのも七海さんだ。そんな事を彼らに言っても無駄だろうけど。

「何だ、各務。なかなかユニークなお友達だな。是非紹介してくれ」

ニヤニヤと笑っている太郎君は今の状況を楽しんでいるようだ。

「てめえをボコツた後はあの女の番だこらあ！！」

「結構好みだったからやつちまうぞポケエ！！」

天下の往来で何を言っているのだろうこの人達は。道行く人が迷惑そうに僕達を見ている。僕も同類か。勘弁してほしい。

「あの女って、七海の事か？」

「そう。これ、七海さんのとばっちりだよ」

僕はため息が出るのを抑える事は出来なかった。こうなる事がわかっていたら、あの時一発くらい蹴っておけばよかった。ああ、未来予知が欲しい。

「かつこよくて素敵な太郎君、助けてくれ」

僕にはどうしようもないので、早々に助けを求める。ついでに媚びも売っておいた。

「そこまで言われちゃ仕方ねえな！助けてやるよ！！」

太郎君は単純馬鹿と陰で呼ばれているらしい。

「なんじゃてめえは邪魔すんなこらあ！！」

ヤンキーAが標的を太郎君に変更した。

「てめえ俺の能力くらいてえのかボケエ！！」

ヤンキーBが歯ブラシを構えた。そしてその歯ブラシを自分の口に運び「俺はやれる！！」何かをする前に僕の隣にいたはずの太郎君が、ヤンキーBの懐に入った。僕には太郎君の動きは見えなかったし、きつとヤンキー達にも見えなかっただろう。

「なっ」

「おらあ！！」

驚愕しているヤンキーBの腹部を、太郎君が力いっぱい殴った。

そしてヤンキーBは吹っ飛び、まるでギャグアニメや子供向けアニメのように飛んで行き、僕達に見えなくなる程飛んで行き、最終的に光った。彼は、星になったのだ。

「ええええええ！！？」

アニメのように星になった相棒の姿を見て、ヤンキーAが驚愕した。

「どりゃあ！！」

そんなヤンキーAに太郎君がアップercutを繰り出した。

そしてヤンキーAは格闘ゲームのようにゆっくりと空中に浮き、

「おらおらおらおらおらー！！」太郎君の空中コンボを喰らった。そしてゆっくり孤をえがきながら飛んでいき、地面で数回バウンドした後、動かなくなった。うん。太郎君の能力はいつ見ても不思議だ。

「安心しろ。みねうちだ」

そして太郎君が決め台詞を言い、ゲームセット。

「さすが太郎君カッコイイ」

拍手をしながらおざなりに褒める。

「よせやい。照れるじゃねえか」

太郎君が照れてる間に、今度こそ太郎君の能力について思い出してみよう。

山田太郎（１７）

能力系統は身体能力強化と改変系。改変系とはいわゆる、常識ではありえない事を起こす能力系統。現実を、改変するという事らしい。重力操作などはここに含まれるらしい。

能力は本人いわく、勇者。一般的には瞬発力強化と、フィクションと呼ばれる能力。フィクションとは、その名の通り虚構。作り物アニメや漫画のような現象を起こす。例えば、人間を遙か彼方に飛ばして星にしたり、格闘ゲームのように倒す事が出来る。太郎君の場合はその二パターンだけだが、行動をターン制にするフィクション能力者もいるらしい。どういう原理なのかは知らない。

発動条件は、瞬発力強化は自分にそれが出来ると信じる事。フィクションは対象より自分が強いと信じる事。らしい。

社会適応難易度は二。瞬発力強化は一般的であり、社会適応は容易であると判断。太郎君のパーソナリティにも問題はないため、本来なら一でも妥当。しかし彼にはもう一つ、フィクションという未だ不明な点が多い能力があるため、二という事になっているらしい。太郎君のように、二つの能力を持つ人は多くはないが、少ないという程でもない。全体の三分の一程度だろうか。彼らは能力を同時に使う事が出来ない等、制約も多いので、単純に彼らの方が優れているとは言えないらしい。一つより二つの方が、僕はいいと思うのだが、そういう単純な話ではないようだ。

「いやあ、朝からいい仕事したぜ。各務、ありがとうな」

照れるのをやめ、かいてもいない汗を拭いながら、太郎君が感謝してきた。感謝される理由は見つからないが、「どういたしまして」と答えておく。

「さっ、行こうぜ」

「うん」

僕は二日連続でヤンキーAを見捨てて歩き出す。三日連続になら

ない事を祈る。

恐らく彼はすぐに目を覚ますだろう。能力は同時には使えない。フィクションを使ったという事は、ヤンキーAがくらったのはただの拳だ。空中ラッシュも派手だったが、見た目ほどダメージはないだろうし、ましてや死ぬ事はない。今の彼は、（色んな意味の）シヨックで気を失ってるだけだ。

太郎君の能力では、絶対に人は死なない。フィクションで死んでも現実に影響はないという理屈らしい。よく考えるとそれ、一度死んでないか？と疑問にも思うが、死んでないのだからまあいいじゃないか。深く考えない方がいいらしい。

星になったヤンキーBも無事だ。太郎君の能力で星になった人は、気付くと元居た場所に、怪我一つない状態で戻っているらしい。その間どこにいるかは不明。フィクションのお約束である。

「いい天気だなー」

「だねー」

ああ、この空のどこかで今もヤンキーBが飛んでいるのだろうか。

5・先輩（過去視）

窓の外は夕日で染まっていた。

「……あれ？」

まるで時間が飛んだかのように、気付いたら放課後だった。教室には自分しかいない。みんな家に帰ったか、部活に行ったのだろうか。いつの間に放課後になったのだろうか。今日一日の記憶が全くない。朝、太郎君と一緒に学校に来た。学校に着くと、七海さんがすでに教室にいて、昨日のヤンキー達は一時間ピッタリに起きたと喜んでいて。先生方に聞いたのだろうか。喜んでいる七海さんに、今日の朝、そのヤンキーに襲われて大変だったと伝えたと、笑いながらごめんなさいと言われた。反省の色なし。それから朝のホームルームが始まって、始まって……今に至る。

七海さんに眠らされたのだろうか。いや、それなら昨日同様七海さんがいるはずだし、僕は七海さんの『おやすみ』を覚えているはずだ。僕には、七海さんにおやすみと言われた記憶はない。そもそも、七海さんは勝手に能力をかけるような事はしないはず。たぶん「……」

机からノートを引き出し、中身を確認する。すると、そこには今日の日付で授業内容がメモられていた。僕の筆跡だ。という事は、僕はちゃんと授業を受けたという事か？記憶は全くないけど。

「……まあいいか」

何か釈然としないが、帰る事にする。僕は部活等には参加していない。たまに太郎君の入ってるボクシング部や、七海さんが入ってるバレー部を見学したりするが、基本的に僕は家にすぐ帰る。菜月が心配であるという理由もあるが、放課後の学校に一人で長居するのは、あまりよろしくないからだ。

「おや？少年。まだ帰っていなかったのかい？」

と、僕が鞆を持って教室を出ようとしたら、神山先輩が現れてし

まった。よろしくない展開だ。

「ええ、まあ。じゃあ先輩、さようなら」

いや、まだ間に合うはずだ。僕は早々に神山先輩に別れを告げる。「まあ待ちたまえよ少年。どうせ暇何だろう？僕とお喋りしようじゃないか」

肩を掴まれてしまった。ニヤニヤと笑う神山先輩を見て、僕は逃げる事を諦めた。

この笑みを浮かべた神山先輩から逃げたら、自宅までついてくる事を、僕は経験によって知っている。菜月と相性が悪い神山先輩が自宅に来るといふのは遠慮したい。菜月の怒りは全て僕にくるのだ。僕はわかりやすく嘆息し、「わかりました……」と言っしかなかった。

「それで、何をお喋りしましょうか？」

神山先輩は第七世代の高校三年生。僕の一つ上だ。男性のような喋り方で髪も短めだが、身体つきは女性そのものだ。七海さんや菜月より女性的だ。

「まずはそうだなあ。いいかな？」

橘君の席を勝手に借りて僕の正面に座っている神山先輩が、舌舐めずりをしながら、主語や述語がない承諾を求めてきた。

「何がですか？」

「もう、わかってるくせにいい」

エロチックだ。だからというわけではないが、僕は詳しく聞かずに「どうぞ」といった。

「ありがとう。僕は少年のそういうところを気に入ってるよ」

神山先輩は僕の頭に左手を乗せる。その瞬間、僕は僕が彼女に吸い取られるような、汲み取られるような気分を味わった。どんどん吸い取られる。今すぐにでも、この手を弾きたい。脳内を掻き混ぜ

られてるような不快感と嫌悪感。二言で言えば、吐き気がするほど、気持ち悪い。しかし、こんなところで吐くわけにはいかない。気を紛らわせる為に、神山先輩の能力を思い出してみる。

神山小夜子（１８）

能力系統は精神感応系。

能力名は過去視。サイコメトリーの種類。文字通り、対象が過去見た風景を見る事が出来る。神山先輩の場合、ついでにその時考えてる事もわかり、最大三日前まで遡れるらしい。

発動条件は対象の名前を知っている事。対象に許可を得る事。対象の頭部に左手をのせる事。許可は能力の使用許可ではなくてもいいらしい。例えば、『付き合ってくれ』や『明日駅前でいいかい？』などでもいいらしい。何かしらの許可を得た。という結果があればクリア。

社会適応難易度は五。物理的に危険性は無し。菜月同様、プライバシー侵害の危険性がある。しかし神山先輩の場合、今現在の僕のように、対象に能力の使用を気付かれる為、菜月程、プライバシーの侵害の危険性は無く、能力だけなら適応難易度は二が妥当。しかし神山先輩の場合は、そのパーソナリティ、思想に危険性がある為五という事になっているらしい。神山先輩いわく、『若さ故の過ち』らしいのだが、過去にちょっとやんちゃをしたらしく、難易度、危険レベルが跳ね上がっている。

「全く迷惑な話だよ。もう国家転覆や超能力者の世界なんていうくだらないものを作るうなんて微塵も考えてないのに、彼らは全く僕を信用しないんだ」

今は、この瞬間、過去になる。らしい。

神山先輩は菜月のように、今現在の僕の考えを知る事は出来ないが、僕の一秒前の考えは知る事が出来る。一秒前なんて、リアルタイムに心を覗かれているのと同じだろう。どうやら神山先輩は、僕の今の過去に辿り着いたようだ。僕の今の考えを、視界を、神山先輩は汲み取っている。それならそろそろ手を離して欲しい。吐きそ

う。

「ごめんごめん。なかなか楽しかったよ」

快活に笑いながら、神山先輩は僕の頭から手を離す。すると先程までの不快感や嫌悪感が嘘のように無くなった。ああ、空気が美味しい。

「楽しかったのなら何よりですよ」

あんな不快感に堪えたのに、つまらないと言われたら救いがない。「さて、じゃあお喋りしようかな。少年は、なかなか楽しい毎日を送っているからね。少年の過去を見るのも当然だが、話すのも楽しいさ。そう、ヤンキー達には笑わせてもらった」

「まあ、確かに」

わかりやすいやられ役だった。そういえば結局、あのヤンキーBの能力は何だったんだろう。

「ちなみにヤンキーB君の能力は、歯ブラシで磨いた歯からビームさ」

そうだったのか。それは見て見たかった気がしなくてもない。能力系統は改変か。というか。

「先輩よく知ってたね」

「まあ、同級生の能力くらいは知っているさ」

「同級生だったんですか」

驚きだ。全くそうは見えない。神山先輩が大人っぽいからか。ヤンキーBの言動が幼稚だったからか。

「とはいえ、彼も、そして僕も、あまり学校には来ない不良君だから同級生と呼べるかはわからないけどね」

神山先輩の言う通り。先輩はあまり学校には来ていない。時たま暇つぶしのように来るだけだ。そしてその暇つぶしに僕は付き合う羽目にいつもなる。困った因果だ。

学校に來ないで先輩が何をやっているかというと、世の為に働いているらしい。過去視は警察の捜査に大変役立つ。先輩いわく『ポイント稼ぎだよ。こういう事をしないと僕は一生牢屋の中さ』とい

うことらしい。

「まあ、そんなヤンキーの話はどうでもいいかな。もっとおもしろい話をしようか少年」

「もっとおもしろい話ですか？」

この三日。神山先輩がおもしろいと思うような出来事が、僕にあつたのだろうか。ないと思う。いや、もしかしたら今日の日中に何かあつたのか？僕は覚えていないが。

「そう。おもしろい話。超能力の話さ」

「超能力の話……」

どうやら違うようだ。日中、僕は何をしていたのだろう。まあいいか。後で神山先輩に聞いてみよう。

「昨日。君は、菜月君がテレパシーを持っているのが、作為的だと考えていたね」

「はい、考えました。多分」

覚えてないけど、今、僕の過去を見た神山先輩が言うなら、そうなのだろう。

「いいところに気付いたね、少年。超能力は作為的なのさ」

「作為的？人為的ではなく、ですか？」

当然な話、人為的に、欲しい超能力を手に入れる研究は昔から行われているらしい。確実に、欲しい超能力を発現させる研究。危険な超能力を、発現させない研究。こうすればサイコキネシス。ああすればテレパス。それはこの超能力研究、超能力プロジェクトの、悲願と呼べるものらしい。

「少年も知っている通り、人為的にこの超能力を。という事は成功していない。人為的に超能力を発現する事には、もちろん成功しているわけだけどね」

神山先輩の言う通り、その悲願はまだ叶ってはいない。脳の三ヶ所に、一定の刺激を与えれば、超能力が発現する。そこまでは確立されている。第五世代くらいまでは、死ぬ事も多く、特に第四世代は、被験者の半数が死んだ。という噂だが、今では、死ぬという失

敗はほぼ皆無だ。

しかし同じ刺激を与えても、個人によって発現する超能力は違う。その違いがどうして生じるのか、それがわかれば、悲願も達成されると思うのだが、かれこれ10年。今現在もわかっていない。らしい。

「少年は知っていると思うけど、世代によってテーマという物があるのさ。目標や、目的とも言えるものがね。例えば、第一世代は超能力が発現するかの確認。僕達第七世代はなんだっけな……そうそう、作為的に精神感応系能力を増やそうというテーマだったかな。その前までのデータで、仮説でも出来たんだろう」

「じゃあ先輩は、成功ですね」

「そうなるね。数少ない成功例さ。超能力だけを、見ればだけど」
神山先輩は肩をすくめて、やれやれ。といった様子だが、やれやれなのは、成功例にやんちゃやされた研究者の方々だと思う。

「十一世代は、社会適応観察。ですよね？」

もちろん、その前の世代でも行っていたが、このように大規模なのはこの世代に突入してからだ。

「それもあるけど、第一テーマは、超能力を見極めることなのさ」
「見極める？」

「そう、見極める。作為的に、超能力を発現させる前段階さ」

ニヤリと笑う神山先輩。どうやら話の核心に迫っているようだ。

「少年、脳を弄る前に性格テストや体力テストを、複数やらなかったかい？」

「やりました」

はいといいえで答えるタイプはもちろんのこと、無意識を探るタイプの心理検査。シャトルランや砲丸投げ等の体力検査。国数社英理等の学力検査。脳を弄る前に、入念に、そこまでののかというくらいの検査をやったから、よく覚えている。大変疲れた。今思い出しても、疲れる。

「鉄仮面と呼ばれる少年が顔をしかめるとは。ふふふ、嫌な事を思

い出させてしまったかな」

「鉄仮面なんて呼ばれたのは初めてですよ……」

陰でそう呼ばれているのだろうか。嫌な事を知ってしまった。

「あそこまで検査をしたのは、君達の世代が始めてなんだよ」

「そうなんですか？」

「そうなんだよ。いつの世代も、身辺調査や簡単なテストは行っていたんだけどね。第七世代以降、念入りに行うようになった。でも、あんなに綿密な検査は少年達の世代だけさ」

「それはつまり……」

第一テーマは超能力を見極めること。作為的に超能力を作り出す、前段階。

「そう、察しがいい少年にはわかるだろ？ パーソナリティと、超能力の関係を見ているのさ。科学者の方々はね」

神山先輩は、教室の隅に設置されている監視カメラに微笑みかけた。

「パーソナリティが、超能力の発現に関係あるという事ですか？」

「仮説の段階さ。同じ部位に同じ刺激を与えたのに違うのは、パーソナリティの違いではないか。人の心を知りたいと願っている人間には、人との交友関係に悩んでいたら、精神感応系の超能力が。体を強くしたいと願っている人間には、身体的にコンプレックスがある人間には、身体能力系の超能力が。わかりやすいだろ？」

菜月は人の心を知りたかったから。七海さんは……眠らせたかったから？ 太郎君は何だろう。勇者願望か？ そして神山先輩の場合は、「その仮説が正しいなら、先輩は過去を知りたかったから、過去視という事になりますね」

「そうなるね。あの頃の僕は、探偵に憧れていたから。過去を暴くのが、探偵だろ？」

そう言っ、神山先輩は照れたように笑った。若気の至り。という感じなのかもしれない。

しかし、その仮説が正しければ、超能力が発現しない人は、超能

力が欲しくなかったという事になるのか？何かおかしいような気がしないでもない。

それに僕の場合は……。

「少年、なかなかおもしろい話だったろ？」

「興味深い話でした」

ああ、何だか嫌な予感がする。

神山先輩の悪い事を考えていそうな笑顔を見ながら、僕は思った。

6・刑事（瞬間移動）

「あ」

マンションのエレベーター内で、唐突に、神山先輩から日中の事を聞くのを忘れていた事を思い出し、つい、声を上げてしまった。朝もエレベーター内で一緒になった女性がこちらを見て、笑った。恥ずかしい。

神山先輩とは超能力の話の後、他愛もない話をした。

例えば、駅前のケーキ屋では超能力者のパティシエ（改变系らしいが、何を改变しているのかは不明らしい）を雇っていてまあ美味い、何を改变しているのかは不明らしい）を雇っていてまあ美味しいが、その横にある、超能力者がいないケーキ屋の方が美味しいという話。

例えば、駅前のパチンコ屋は不正防止のため出入り口に人間嘔吐発見機（『はい』か『いいえ』しかわからない代わりに条件が軽い、例えば手を握るだけとかの超能力者）がいるらしいのだが、なぜか女性には時間をかける。そのせいか、あのパチンコ屋は女性客が少ないという話。

そんな他愛もない世間話だったわけだが、他愛もないからこそ楽しく興味深い話だったため、記憶の欠落の事、すっかり忘れていた。まあいいか。何か大変な事が起こっていたら、神山先輩から話してくれただろう。つまり神山先輩が何も言わなかったという事は、たしかにしたことない、もしくは僕の気のせい。という事だろう。多分。うん。神山先輩を、信用しよう……信用しよう。

僕が自分にそう言い聞かせている間にエレベーターは最上階に。女性がドアを開けていてくれるので、先に行く。「おやすみ」と言われたので「おやすみなさい」と返し、エレベーターを出て、通路を左折。

ドアの前で、ポケットから鍵を取り出しながらふと横を見ると、通路を右折した女性の後ろ姿が見える。何かおかしい気がしたが、

その何かはわからないまま、女性から目を離し、ドアを開ける。

「ただいまー」

玄関に入ると、いつもはない見慣れた靴が一足あった。遠山さんが来ているようだ。

「おう。お邪魔してるよ」

思った通り、リビングには遠山さんがいた。よれよれのスーツで、ニヒルに笑う姿は妙に似合ってる。椅子に座る姿も、何だかっこいい。

「どうもお久しぶりです。何か飲みますか？」

テーブルに飲み物はなく、菜月の姿はもちろんない。自室に引きこもってるのだろう。遠山さんは一応、客人なのだから、お茶くらい出して欲しいものだ。引きこもりに期待するのは酷かもしれないが。

「いや、いいよ。もう帰ろうと思ってたところだから。菜月ちゃんにも、さっさと帰れと言われてるからね」

「なんかすいません」

兄として、妹の失礼は謝罪しなければならない。「いや、いいっていいって。いつもの事だし」と、遠山さんは言ってくれた。いい人だ。さすが警察官。

菜月は遠山さんの事が好きではないらしく。度々暴言を吐く。僕から見たら、遠山さんは頼りがいになるいいお兄さんにしか見えないので、嫌いではない。菜月には、遠山さんの別の姿が見える、というより聞こえるから嫌いなのだろう。

「しかし、遅かったね。そろそろ帰ってくるかなと思って待ってたよ、一時間経ってしまっただよ」

「一時間も待ってたんですか？」

「ああまあね。時の流れは速い速い」

一時間もリビングにいたら、そりゃ菜月もさっさと帰れというだろう。お茶を出さなかったのはダメだが、その点は菜月が正しい。ようは、僕の帰りを待つという名目で、サボっていたわけだから。

不良警官だ。

「それで、部活でも始めたのかい？」

「いえ違います、ちょっと友達と話してたら盛り上がってしまっ

「女？誰よ。彼女か青少年」

「違いますよ。まあ一応、友達みたいな人です」

神山先輩の事は、遠山さんも知っているから、名前を出してもいいのだが。何分、神山先輩と遠山さんは仲が悪い。名前を出しただけで、互いに唾を吐くくらいだ。どうしてあんなに嫌うのだろう。名前が似ているからかな。と、惚けてみる。

「部活もしてないのに、放課後長時間お喋り出来る女友達がいるとは。羨ましい生活送ってるねえ各務君」

「そうでもないですよ」

謙遜でも何でもなく、そうでもない。

「用事って、また何か事件ですか？」

「おや。話題を変えるのかい。お兄さんは青少年の青春をもう少し聞きたかったんだけどね」

ニヤニヤと笑いながら、遠山さんは懷に手を入れて「禁煙です」タバコを取り出すつもりだろうから、先に釘をさす。舌打ちされたこの人、帰る気ないな。

「いやー、口が堅い奴がまたいてね。共犯がいるから、出来る限り早く、どうにかしたい。明日、菜月ちゃんを借りていくから。一応聞くけど、いいよねお兄さん？」

「菜月がいつていうならいいですよ」

「サンキュー。謝礼はいつも通り振り込んどくから」

遠山さんは警察官である。特殊犯罪捜査科という科に所属しているらしい。時折、菜月に捜査の協力を頼みに来る。神山先輩はポイント稼ぎで協力しているが、菜月は小遣い稼ぎで協力している。

精神感応系の能力が、捜査の様々な面で役立つのは間違いないが、警察官の中にも精神感応系能力者にはいるとは思う。なのになぜ、菜月に協力を求めにくるのかというと、菜月が無条件能力者だからだ。

精神感応系能力を使う場合、ほとんどの場合、対象の名前が必要となってくる。それは何でもよいような枷に見えるが、事件捜査においては時に、大きな枷となる。完全な黙秘、名前すら名乗らない犯人、容疑者がいた時だ。そういう容疑者に対しては、精神感応系の能力は使用出来ない。そういう容疑者にこそ、必要な能力なのだ。

そこで、無条件で相手の考えている事を読める菜月の出番となる。菜月の仕事は容疑者の名前を読み取る仕事という事だ。菜月の能力では、相手が自分の名前を考えないと名前を知る事は出来ないのだが、そこは他の能力（例えば、ある事を思い浮かばせる想起能力）でカバーするらしい。菜月は見るだけで読み取れるので、マジックミラー越しで事足りる。つまり危険も少ないので、僕も容認している。

「保護者の許可も取れたし、本当に帰るわ」

そろそろタバコも吸いたいし。そう言って、遠山さんは額に人差し指と中指を当てた。そして目をつむる。まるで何かを、そう、『気』でも探っているような姿だ。

「お仕事頑張って下さい」

「おう。またな」

遠山さん目を開け、ニヤリと笑い、消えた。比喻表現ではなく、本当に、僕の目の前から消えた。相変わらず便利そうな遠山さんの能力を、僕は思い返す。

遠山亮（27）

能力系統は、操作・移動系。言葉通り、精神のように目に見えない、本来触られないものではなく、触れられる物質を操作したり移動させる能力はここに含まれるらしい。ポピュラーな物では、念動力はここに含まれる。

能力名は瞬間移動。つまり、テレポート。空間を越えて、移動出来る。とても便利な能力だ。遠山さんの場合、自分だけでなく触れている物、人でも物でも一緒にテレポート出来るので、さらに便利。

しかし、その能力者は多くはない。今、能力者が全体でどの程度いるかは正確には発表されていないが、まだ一万は越えてないらしい。その約百分の一。百人程度しか、空間跳躍能力者、つまりテレポーターはいないらしい。それは無条件能力者と同程度の数だ。神山先輩から聞いた仮説通り、パーソナリティが能力発現に影響するなら、もう少しいてもいいのではないだろうか。だって便利そうだし。僕も欲しかった。

能力発動条件は複雑。前提として、一度でも行った事がある場所しか、テレポートは出来ない。そして、移動先によってさらに条件がつく。

例えばテレポートする先が外、道路やデパートのような公共の場、誰でも許可なく入れる場所なら、一度でも行った事があるだけでテレポート出来るが、テレポートする先が自宅やマンシヨンの場合は、家主や管理人に許可を得なければならぬ。その許可も、神山先輩とは違いちゃんと『ここにテレポートしてもいいですか』という許可だ。一度でも許可されれば、その後はずっと行けるようになるらしい。吸血鬼みたいな条件だ。

他にも跳ぶ場所によって、細々とした条件が色々とあるらしく、僕も完全には把握していない。とりあえず、その条件を全てクリアし、その場所をイメージすれば、距離や質量に関しては（質量は制限もあるようだ）ほぼ関係なくテレポート出来るらしい。さっきのポーズはそれっぽいから遠山さんがやってるだけで、条件には入ってない。マンガの影響らしい。

社会適応難易度は二。テレポートは運搬作業において有益であり、他にも社会利益を生むと考えられる。しかしその反面、犯罪に使用された場合、恐ろしい事になるのは目に見えており、テレポーターの適応難易度は、パーソナリティに大きく依存する傾向にある。その点、遠山さんは警察官であり、パーソナリティには問題がない。というわけで、二という数字に落ち着いている。三か四が多いテレポーターの中では、大変珍しいらしい。

僕としては一でもいいのではないだろうかと思う。真面目で優秀だが、堅物でも融通がきかないわけでもなく。組織ではなく、世のため人のためにつくす気持ちがある遠山さんを、僕はそれなりに尊敬している。お世辞でも媚びを売っているわけでもなくだ。

「お兄ちゃんは騙されてる。私としては五でも足りなくらいだね」声の方を向くと、菜月が自室のドアを半分開けてじと目でこちらを見ていた。のぞき見、というよりのぞき聞きをしていたようだ。

「おかえりお兄ちゃん。あのロリコンもう帰った？」

キヨロキヨロと部屋を見回しながら、菜月がリビングに入ってきた。いつも通りのパジャマである。嘆かわしい。

「嘆くべきはお兄ちゃんがロリコンに騙されている事だよ！」

「ロリコンじゃなくて遠山さん、もしくは遠山警部と呼びなさい。失礼だ」

「ロリコンはロリコンで十分なんだよー！」

菜月がテーブルを叩き訴える。元気だなと思った。睨まれた。

菜月曰く、遠山さんはロリコンらしい。しかも生粋のロリコン。

12歳以下には興味がないらしい。菜月はテレパスによってそれを知ったらしい。僕にはとても信じられなかったし、12歳以下なら菜月には危険がないのだから、そんなに嫌わなくてもいいじゃないかと思ったのだが、『ロリコンキモい！そして私は売れ残りじゃない！』と、怒られた。遠山さんにとっては15歳は売れ残りらしい。

ロリコンロリコン信じて信じてあんまりにも菜月が騒ぐので、僕が遠山さんに『ロリコンなんですか？』とストレートに聞いたところ、『若い方がいいだろ？』と二ヒルな答えをいただいた。真実は闇の中である。という事にした。

「お兄ちゃんは真実から目をそらしてる！あいつはロリコン間違いない！」

「菜月。若い方が好きなのは男としては仕方がない事何だよ」

「ま、まさかお兄ちゃんも……？」

諭すように僕が言うと、菜月が引いた。自らを抱きしめ頬を染め「お兄ちゃんが私をいやらしい目で見ている……！」と、どよめいている。フリをしている。僕の考えを読める菜月ならそんな事はな
いと知っているからだ。

それに、遠山さんは庇うためにああは言ったが、僕は年上が好きだ。外見は神山先輩がストライクかもしれない。あの性格でなければ恋に落ちていた可能性も「お兄ちゃんの馬鹿死んでしまえー！！今日の夕食はチーズフォンデュを所望するー！！」菜月が泣きながら自室に走り去ってしまった。望んではない人の気持ちを知り、傷ついてしまうとは。不憫な妹である。そんな、色んな意味で不憫な妹のために、夕食はチーズフォンデュにしたいところだが、さすがに無理だ。シチューにしよう。乳製品だし。

僕が夕食を作ろうと席を立った時、遠山さんがさっきまで座っていた場所に、突然現れた。テレポートしてきたのだ。ビックリした。「ど、どうしたんですか？」

「いや、靴忘れた。来るときも能力使ったし。菜月ちゃんに怒られて靴脱いだの忘れてたわ」

「……」

テレポートは便利な能力だが、忘れ物が多くなるのが難点らしい。

7・主人公○

「……？」

目を開けた。目の前の壁に立て掛けられている鏡に、椅子にロープで縛られ身動きがとれず、口をガムテープで塞がれ喋る事も出来ない僕が写っていて、その後ろにはエレベーターで出会ったスーツの女性……？ツララのように冷たく鋭利な雰囲気、エレベーター内で見た笑顔からは全く掛け離れた物なので、もしかしたらただのそっくりさんかも知れないが、というか何だこれ。何だこの状況。何だ？

混乱している僕を尻目に鏡の中で女性が懐に手を入れ、懐から「！！」あれは拳銃ピストル長いのついてるサイレンサー？マングアニメドラマで見るけどまさかそんなおもちゃではなかった。

鏡に写る女性はゆっくりとした動作で拳銃を、鏡に写る僕に向け、撃った。鏡が割れる甲高い音が、部屋に響く。気持ち悪いくらい静かに撃たれた弾は、僕にはもちろん見えなかったが、蜘蛛の巣状に割れ、粉々になった鏡が、確かに弾が発射された事を、それがオモチャではないという事を物語っていた気がした。

「混乱している者に、さらにショックを受けさせる。すると、さらに混乱する者もいるが、逆に落ち着く者もいる。お前は後者のようだな。素晴らしい」

女性の感情がない高圧的な声と共に、後頭部に何か固いものが押し付けられた。鏡がなくなった今、後方を確認する術は僕にはないが、恐らく間違いなく、何かとは拳銃だろう。

僕は唯一動かせる眼球を動かし現状を出来る限り把握しようとする。

僕が今いる部屋はコンクリート打ちっぱなし。1R。家具等は僕が縛られている椅子以外一切なく、窓も割れている。窓の外からは

生活音は聞こえてこず、部屋内は埃っぽい。印象としては路地裏を進んだ先にありそうな廃ビルの一室。出入り口は割れた鏡の横の一つ。監視カメラは見える範囲で天井角に二つという事は「聞け」聞くから拳銃を押し付けしないで下さい。

「正直に答える。記憶の欠落に関して、お前は誰かに話したか」

欠落。昨日のあれか。僕は拳銃に急かされるのですぐ頷く。小突かないで。

「素晴らしい。私の能力は催眠系統の、そのものずばり催眠だ。対象を意のままに操る。能力名は特につけていないが、仲間からはオートコントロールと呼ばれていた」

女性は唐突に淡々と、僕に能力の説明をしてくる。その理由が僕にはわかる。わざわざ自分の能力を説明する理由なんて、一つしかない。

しかし、わかったところでどうしようもない。今の僕は耳を塞ぐ事すら出来ないのだから。

「条件一、密室において対象に警戒されず『おはよう』と『おやすみ』を返答させる事」

騙された。あの笑顔に騙された。エレベーター内で、すでにこの条件はクリアされている。

「条件二、これが一番面倒なのだが、対象が記憶の欠落を私以外に口外しない事。どうやらお前は口外していないようだな。口外していたら能力を使うのを諦め、実力行使に移るだけだったが」

もうすでに実力行使だろうがと言いたいが、物理的にも精神的にもそれは叶わない。

しかし、記憶の欠落？奇妙な能力発動条件だ。恐らく、『おはよう』という条件をクリアすると、対象、今回の場合は僕の、一部の記憶が欠落するのだろう。

神山先輩と遠山さん、この二人との遭遇ですっかり欠落に関して忘れていたので、菜月に知られる（聞かれる）事はなかった。そして眠り、起きて、家を出て、エレベーターでこの女性に会い……

今に至る。クソ、神山め。

「条件三、対象が催眠を受けるのを許可しなければならない。そして条件四、対象は私の能力を知っていなければならない」

「やっぱりだ。催眠系統の能力は、能力者の情報を開示するという条件がつく場合が多い。七海さんのような条件は、珍しい部類に入る。」

「以上だ。サービスで言うておくが、適応難易度は、五だ」

「この能力の条件から考えれば、二か三でもおかしくないだろうに。パーソナリティが異常だ。」

「これで三以外の条件は満たした。後はお前が催眠を受け入れればいい。聞くぞ。あなたは私の催眠を受け入れますか？」

声は優しく小突きは多く。涙と汗が出てくる。何だこの状況何だこの状況何だこの状況。ガムテープがなければ泣き叫んでるところだ。頷けば楽になるのだろうか？

「ダメか。仕方ない」

「……！」

仕方ないって何仕方ないって何仕方ないって何！？首を横に振り勘弁してくれと頼む願うお願いします綺麗なお姉さん許して下さい死にたくありません本当に「聞け」聞きますから拳銃で叩かないで下さい痛い。

「理由もわからず操られるのは嫌という事か。仕方ない、説明してやる」

一瞬、この人天然か。と、平和的な事を思った。

「私の狙いはお前ではない。私にはガキを操って喜ぶ趣味はないからな。私の狙いはお前の妹、無条件能力者だ」

「驚かない。そうだろうと思った。無条件能力者は珍しい。珍しいモノは、狙われる。使い物になるならなおさらだ。」

「お前の妹は、捜査に協力しているな。近々、また捜査協力を頼まれるだろう」

すでに頼まれてる。知らないのか。そうか。テレポート。そうい

う事か？

「それに協力されると困る。安心しろ。殺そうとは思ってない。ただ少し、こちらが対処出来るまで、誘拐するだけだ」

なら、僕がいない日中に勝手にやってもraithたい。あの引きこもりを外に出してくれるなら、どうぞご自由に。返してくれるなら、喜んで。

「お前の妹は生粋の引きこもりだ。私が保証してやる。荷物の受け取りさえしないとはどういう教育をしている」

僕のせいじゃありません僕のせいじゃありません。だから小突かないで。

「しかもあの部屋、家主の許可なく入れないようになってるな。遮断レベルではないが。結界か」

叩かれたので頷く。一般的に結界と呼ばれる中でも、物質催眠だ。物体に催眠をかける超能力。『このドアは、家主の許可なく開ける事は出来ない』という催眠をドアにかけておく事により、そのドアを知覚した人間は、そのドアを勝手に開けようとする気持ちがなくなる。ピッキングをしようとする気持ちが、破壊しようとする気持ちが、なくなる。警察に協力するという事になった時、遠山さんの同僚にかけてもらった。菜月の安全のために。

「面倒な事を。そんな事をするから私も、お前を操るという面倒な事をしなければならなくなった」

という事らしい。なんという事だ。こんな事になるなら、あんなの頼むんじゃないかと後悔する。

しかし、あんなの保険みたいな物だ。切り抜ける方法なんていくらでもあるだろうに。この人、諦めが早いのではないだろうか。もっと頑張つて欲しかった。

「これで理解したな。お前を操る理由を。安心しろ。私の能力は、対象が催眠にかかった事さえ忘れる類いの物だ。対象の無意識レベルに指示を植え付ける。後は、お前が自然に私の指令を、妹を外に連れ出すという指令を、達成する」

何を持って安心しろと言っているのかわからない。

しかしなるほど、確かに強力だ。条件の厳しさもわからないでもない。催眠能力には、具体的な指示をしなければならない物も多い。そんな中で『外に連れ出す』という指示だけで、後は僕が自然に行う催眠とは。それなら、菜月にもばれないだろう。指示すれば後は勝手に。何だっけ……そう、オートコントロールか。

「だから、肉親を裏切るという罪悪感は芽生えない。安心して、操られる」

そういう意味ですか。至れり尽くせりですね。

「以上だ。これで心置きなく頷けるだろう」

「！」

いや、もう少し待って！もう少し時間をかけて僕を冷静でいさせて！

「受け入れれば殺さない」

「！？」

それつまり逆は！？

「喚くな。お前はただ頷け。あなたは私の催眠を受け入れますか？」
ちよつと待てちよつと待てもう少し待って考えさせて。小突かないで叩かないでぐりぐりしないでもう少しもう少し。落ち着け落ち着け僕の考えが正しければもうそろそろ来てもいい頃だからでも間違ってるかもしれ「あなたは私の催眠を受け入れますか？」

わかったから待って待ってあーもー何でこんな事に死にたくないこの人何だか面倒だからという理由で殺しそうで怖い助けはまだか監視カメラで見てるだろうになぜ来な「あなたは私の催眠を受け入れますか？」

わかったから黙ってるよああそうか実験だもんな観察実験中にはよほどのトラブルが起こらないとあちら側が介入しないのは常識だよなあのカメラはあってないような物だからってわかるけど死にたくない「！！」

痛い痛い殴つ「！！」

また殴ったなこいつもうやだもうやだ痛い！何も考えたくない考えるのは僕の命の事だけにする！

「お前は。私の。催眠を。受け入れるな？」

ああもう殺さないなら何だっていいよ。僕は「今日の夕食はカレーでいいか？」頷いた。

「よし、まさにナイスタイミング。大丈夫かい各務君？」

誰だ目の前入口のドアの前にいきなり現れた人がいて涙と混乱していてよくわからないがいやわかるわかる落ち着け落ち着け助かった？

「うわ。お前、顔酷いなー。そんなに怖かったの？」

いきなり現れたのは遠山さんだった。レポートしてきたのだろう。こちらに、女性に拳銃を向けている。助かった？

「名乗るべきか？それとも先に説明してやろうか？」

これは僕に言った言葉ではないだろう。声が低い。真面目モードだ。助かった？

「名乗らなくてもいい。お前の情報は知っている」

女性も、さっきより緊張した声になっている。拳銃は僕の頭に突き付けたまま。諦めて解放して欲しい。

「そうか。俺、有名人だもんな」

「そうだ。テレポーターの遠山亮。お前がロリコンである事は仲間からよく聞いている」

「さて、俺がどうしてここに來れたかの説明をしよう」

「待て。先にお前が本当にロリコンなのかを言え」

「そう。俺の能力は瞬間移動。一度行った場所なら基本行ける。後はその場所の座標をどう決めるかだが。今回は、各務君がいる場所とした。その場所が許可なく入れる場所かどうかは賭けだったが、まあ、ご覧の通りだ」

「なるほど。話しには聞いていたが。まさか本当にロリコンだったとはな。姪に手をかけたのは本当なのか？もしそうなら、お前の適応難易度が私より低いのは納得が出来ない」

「それはガセだ。誹謗中傷だ。ノータッチが基本だ」

「なるほど。聞いていた通りの変態。気持ちが悪い」

「気持ち悪いだと？それは聞き捨てならないな。子供を可愛がる事の何がいけ」「！！」

真面目にやれよ！！何なんだよこいつら友達かよ！七海さんに眠らされる！

「各務君落ち着きなよ。こういう時こそ冷静にが基本だろ？作戦、キャラを大事に」

「盾は喚くな。じつとしてろ」

ああもう落ち着け落ち着け。頭に血が上っても何の意味もない。死にたくないなら落ち着いて状況確認だ。

今部屋にいるのは僕と遠山さんと女性の三人。僕は椅子に縛られ身動き取れず、喋る事も不可能。遠山さんは僕の前、距離は約十メートル、かな。わからないけどそのくらいで、拳銃を僕に向けてる……僕に向けてる？女性は僕の背後で、僕の頭に拳銃を突きつけ、身を屈め、僕を盾にしているようだ。

つまり遠山さんは僕ではなく、僕の後ろに隠れる女性に拳銃を向けているのだ。しかしこの部屋にある拳銃全てが僕に向けられているという事は変わりようがない事実であり、今一番、というか唯一命の危機が迫っているのは僕である事は間違いない。クソ、人事だと思ってこいつら！！

さらに言えばさっきの遠山さんの口ぶりからやはり、僕を囫に使った可能性が出てきた。遠山は味方ではない敵だ。諸悪の根源。姪っ子に殺される！

「そんな目で見るとなよ青少年。敵はそっち。俺、味方。悪かったって。後で謝礼は弾むから」

謝礼という言葉で僕の遠山さんに対する敵対心が薄れた。現金な奴だと内で笑ってみる。よし、冷静になってきた。

恐らく事情はこうだろう。

まず、女性の仲間が捕まった。なかなか口を割らないので、警察

は無条件能力者を使う事にする。無条件能力者が珍しく、その上使い物になる物が少ないと言っても、菜月以外にいないわけではない。そういう人達にも捜査協力の依頼が行くはずであり、当然、その人で事足りれば、菜月に依頼はこない。ましてや、菜月の年齢を考えれば、菜月に依頼がくるのは後ろになる。と、思う。

困るのは女性である。仲間から情報を読まれるわけにはいかないから、女性は捜査に協力する無条件能力者を次々と拉致しつつ、対策を練っていた。対策というのがどういう物かわからないが、多分脱獄とかだろう。

今度困るのは遠山さん側である。いつこうに捜査は進まないし、数人拉致られてるし、女性が無条件能力者の情報をどう手に入れているかも気になるとこだ。というわけで、囷作戦という事だろう。大筋は多分合ってると思う。

現状、その作戦はうまく行っているようだが、不満があるとしたらただひとつ、僕を囷に使った事だ。

「だからそんな目で見るなって。頭がいい各務君ならもう理解しただろ？ 適材適所だ適材適所」

何が適材適所だ。

「素晴らしい。ここに来る適材はロリコンしかいなかったという事だな」

僕にとっては素晴らしくないが、女性の言う通りだ。なぜ一人で来た。

「あいつ、街の探索怠ってやがった……」

遠山さんは気まずそうに視線を逸らした。どうやら、もう一人来るはずだったのだが、このビルに一度も来ていなかったようだ。と、いか目逸らすな。

「交換条件だロリコン」

女性が言った。相手が油断したところをどうこうする人ではないようだ。

「私を見逃せば、こいつは解放してやる」

素晴らしい。

「却下だ」

「!？」

「交換条件だ年増。俺をロリコンと言わなければ、自首した事にし
てやる」

「!？」

何言つてんだこいつ!？」

「喚くなよ青少年。男だろ？」

「!!」

関係ないだろ死ぬロリコン!!

「同情する」

同情された……拳銃を頭に突きつけてる方に、警察官ではなく犯
罪者に同情された。何だこの状況、何だこの状況。どうしてこうな
った……。

「おい。もつと人質を大事にしろ」

何だこの人。凄い優しい。いい人じゃないか。惚れてしまいそう。
拳銃を頭から離してくれたらだけど。

「年増。お前、そいつの、佐藤各務の能力、知らないだろ」

ニヤリと。遠山さんは、罨に嵌まった人間を嘲るように、笑った。

僕はその意味を、悟った。

「……どういう意味だ？」

女性はその意味がわからない。

僕にはわかる。嫌という程わかる。

だから僕は、首を横に振る。やめてくれと涙を流し、目で訴える。
遠山さんに、訴える。女性が動くなというように頭を拳銃で殴って
くるが今はそれどころではない。そんな騒のような痛み、今の僕に
とってはどうでもいい痛みだ。

そんな事より今はそんな事より今はどうにかしないと、どうにか
して遠山さんに考え直してもらわないと。

僕は死ぬ。

「何だ。こいつの能力が何だと言った。こいつの能力は取るに足らない物、適応難易度一と聞いている。それがどうした。なぜ、なぜこいつはこんなに怯えてる」

「怯える理由は簡単さ。死にたくない。ただそれだけの事。じゃあな青少年。リセットだ」

「！！」

やめてくれ！

僕のくぐもった絶叫と心の絶叫に何の意味もなく、遠山さんは、拳銃の引き金を、引いた。

爆音。

サイレンサーがついてない拳銃からは、爆音がした。

空砲ではない。

女性の時とは違い、不思議な事に僕には、弾が見えた。

ゆつくりと、スローモーションで、弾が、近づいてくる。

空気を、空間を突き進み、ゆつくりと、しかし確実に、弾はこちらに進んでくる。

ゆつくりと進む世界の中で、僕は何故か思い出していた。

僕は昨日の寝る前に見た、『夜はこれから！』というか私にとって一日はこれから？』と言った菜月を思い出した。

ああ、兄は本当に妹が心配だ。

僕は昨日の夕食を思い出した。

ああ、僕の最期の晩餐はシチューか。

僕は昨日の遠山さんとの会話を思い出した。

ああ、なぜ僕はこんな人を尊敬出来ると思ったのだろうか。

僕は昨日の神山先輩との会話を思い出した。

ああ、なぜ僕はあんな人を信賴してしまったのだろうか。

ああ、これが走馬灯か。

弾はすでに僕の目の前にある。もうすぐこの弾は僕の額を貫くだろう。

もうすぐ僕は死ぬだろう。

弾が僕の額に当たった。最期に僕は僕の能力を確認する。

佐藤各務（１７）

能力系統は改変。

社会適応難易度は一。

能力発動条件は、走馬灯を見て死ぬ事。

能力名は、一応フィクション。自分でつけた物は無し。

以下、能力を知った知り合いがつけた能力名を羅列。

夢落ち（春日七海）

セーブ（山田太郎）

使う状況になっちゃダメな力（佐藤菜月）

リセット（遠山亮）

再起動と書いて、コンティニュー（神山小夜子）

そして僕は死んだ。

8・主人公（再起動）

気付くと僕は、拘束を解かれた状態で、別の場所にいた。

「……！！」

ここがどこかを把握する前に、偶然目の前にあったゴミ袋を掴み、僕は吐いた。胃をひっくり返して内容物を全て吐き出す勢いで、吐いた。気持ち悪い。死ぬのは、気持ち悪い。ゴキブリを素足で踏みつけるよりもフナムシを素手で掴むよりも気持ち悪い。これが吐かずにいられるか。

「おやおや少年。人の部屋にいきなり現れて、いきなり吐くとは、礼儀知らずだなあ」

礼儀？ 知るか。死んだんだぞ僕は。頭を打ちぬかれて、僕は死んだんだ。うっ。

「吐くならこっちで吐いてくれ」

苦しい。襟を掴まれ引きづられる。喉がしまる。以外に力があるなこの人 神山先輩は。

「ほら。吐くならここと、相場は決まっているだろ」

僕はトイレに放り込まれた。すぐ便器にしがみつき、吐く。さっきほとんどの内容物を出したので、胃液ぐらいしか出ない。喉が焼けるように痛い。口の中が気持ち悪い。最悪だ。しかし、生きている。

「……はあ」

しばらく吐くと、吐き気が収まった。一息ついて、洗面台で口をゆすぐ。鏡に写る顔は蒼白。顔だけではなく手も紫色で、体中の血の気が引いている。その血はどこにいったのだろうと、少し疑問に思っ。

「……」

力が入らず、震えている手を、ゆっくりと僕は動かし、自分の顔

にふれる。冷たい。冷たいが、死体よりは冷たくない。ああよかった。確かに僕はここにいて、額に穴もあいていなくて、生きているよかった。本当によかった。

「まるで死んだような顔をしているね」 いつの間にいたのか。僕の後ろで神山先輩が、実際に死んだ人間には笑えない冗談を言った。「少年、オレンジジュースと水があるけど、水でいいよね？」

鏡にうつる神山先輩が、水が入ったペットボトルを僕に見せる。この状態でオレンジジュースなんて飲んでいられない。当たり前な選択肢。振り向くのも喋るのも億劫に感じている僕は、鏡の神山先輩に向かって頷き答える。

頷いた僕を見て神山先輩が、笑った。それはさっき見た、遠山さんの嘲笑にそっくりだった。「っ！」

僕がそういう事かと気付いた時にはすでに遅かった。許可を得た神山先輩は、僕が振り向くより早く、僕の後頭部を掴み、鏡に叩きつけた。痛いし気持ち悪い。さっきとは違う気持ち悪さ。

サイコメトリー。記憶を読まれているとわかっていても、今の貧血状態の僕には神山先輩の手を振りほどく事が出来ない。虚脱感と嫌悪感に身を任せる。あ、吐き気が振り返してきた。

「なるほどね」

遡る記憶が少なかったからか。昨日より短い時間で神山先輩は解放してくれた。僕はそのまま崩れ落ち、便器を抱え、えづく。気持ちわるい。

「なるほど、なるほど。一部つまらない事もあったけど、まあ、こんなところかな。少年、水はここに置いておくよ。よくなったらリビングにおいで。お喋りしよう」

「……死ね、黒幕」

僕は便器に毒を吐き、すぐに水を流した。

神山先輩がいるからわかってはいたが、ここは神山先輩の家だった。マンションの一室、1LDK。トイレにも風呂にも監視カメラがついている特別な部屋だ。

体に血が巡り、いくぶんか気分がよくなった僕は、リビングの万年こたつ（神山先輩はこたつが好きなのだ）で、神山先輩と向かい合って座った。こたつの上にはお茶が置かれていた。

神山先輩はお茶を飲み、口を開く。

「いや、僕は黒幕じゃないよ」

「……どの口が言うんですか。そんなわかりきった嘘」

「この口」

「……先輩、僕は太郎君と違って、殴る時は男女平等ですよ」

「やだあ。各務君こわあい。これで許してえ」

神山先輩はニヤニヤ笑いながらそう言っ、懐から茶封筒を出した。

どうやら神山先輩は、僕の怒りをお金の力で収めようという魂胆のようだ。甘くみないでいただきたい。確にお金の力は絶大だが、よほどの金額でなければ僕は拳を振るうぞ。という意気込みで僕は茶封筒を確認した。お札がひいふうみい……「神山先輩は黒幕なんかではありません。優しく後輩想いのいい先輩です」許した。ついでに媚びも売った。

「うん。少年は相変わらず、金と死の危機に弱いね」

クスクスと神山先輩は小馬鹿にするように笑うが、なんとも言うがいい。そもそも、その二つに強い人間なんているのだろうか。断じて、いない。と自分に言い聞かせながら、僕は茶封筒を懐にしまふ。後から僕を殺した遠山さんからもいただける話になっているし。思わぬ収入である。

「君の怒りが収まったところでお喋りを始めようか。そうだね。昨日は僕から話したから、今日は君からだ。何が聞きたい？」

「聞きたい事ですか。色々ありますけど……神山先輩は、どこまで

噛んでいたんですか？」

記憶の欠落を指摘しなかった事といい、死んで跳んできた僕の前に都合よくゴミ袋があった事といい。お金をいただいたので、もう黒幕とは思ってはいないが、神山先輩が今回の事件に関与していたのは間違いない。

「君は僕が君の事を過大評価しているかもしれないが、僕からしてみれば、君が僕を過大評価しているね。今回僕はたいした事はしていないよ。僕みたいな小物が、黒幕なんてありえない。ただ、昔仲良しだった佐々木さんに、無条件能力者の情報を流したくらいさ。それだけだよ。」

佐々木さんというのは、恐らく天然女性の事だろう。なるほどなるほど、神山先輩はあの人に無条件能力者の情報を教えただけか。もちろんその中には菜月の情報も入っていただろうし、同居している僕の情報もあっただろう。なるほどなるほど……。

「それはつまり、神山先輩が全ての元凶では？」

なんとなくだが。あの女性、佐々木さんは、一人では無条件能力者の情報を手に入れる事は出来なかった気がする。あの人は舞台を作る側ではなく、演じる側な気がした。

「何を言っているんだ少年。全ての元凶は、犯罪に走った佐々木さんとその相棒じゃないか。君が言っているのは、殺人事件があったら推理小説が元凶だと言っているようなものだよ？」

「それが悪用されると確信しながら書いたなら、推理小説も元凶ですよ」

「まさか、佐々木さんが無条件能力者の情報をあんな風に使うなんて……少年、僕も被害者何だよ」

悲しげに目を伏せる神山先輩を見ると、そうだったのかと納得した上に、勘違いしてすいませんと謝罪したくなるが「嘘ですよね」

「うん」やっぱり嘘であった。

「でもねえ少年。君は僕が愉快犯的に協力したと思っているだろ？」

「ええ、まあ」

「ああ心外だよ。とても心外だ。僕は君に感謝されてもいいくらい何だよ？」

「感謝ですか」

心辺りはお金をくれた事以外にない。

「そう、感謝さ。いいかい少年？君はどうやら佐々木さんの事を天然美人さんと思っていけないようだが、彼女はそれなりに優秀何だよ？僕が協力しなくても、いずれ、ちゃんとした情報を手に入れ、菜月君を狙っただろう」

「ちゃんとした情報？」

「そうだよ。例えば、そうだね。菜月君は確かに荷物を受け取る事もしないが、唯一、趣味で集めてる人形が届く時は、受け取るのか？ドアからの侵入は難しいが、屋上からの侵入はたやすいとか？少年の能力はレベル一だが、取るに足らない物ではないとか？」

「えーっと、ちよつと待って下さい……」

何だか色々、気になる事が。

「菜月って、荷物受け取ったんですか？というか趣味？人形？」

いつも帰宅すると訪問お知らせがポストに入っているのだが。

「知らなかったのかい？菜月君は人形やぬいぐるみを集めるのが趣味何だよ。ああそうか。お兄ちゃんには隠していたんだっただね。ばれないように人形だけは自分で受け取るんだった。忘れてた忘れてた。少年、聞かなかった事にしておくれ。いやあ、うっかりしてたなあ」

自らわざとだと明かす神山先輩は置いておいて。どうしてそんな事を知っているのかも置いておいて（先輩が菜月の部屋に入った事なんてあっただろうか）。そうか知らなかった。菜月にはそんな趣味があったのか。あの扉の向こうはファンシーな世界が広がっているのだろうか。入れないのが少し残念だ。

しかしそれよりも何よりも。そうか、そうだったのか……あいつ荷物受け取れるんだ。今度から受け取るように強く言う事にしよう。うん。

「少年少年。そこだけではなくもつと食いつくべきところがあるだろ？僕に感謝したくなるよう情報があつただろ？」

「先輩が僕に対して、今まで感謝されるような事、一度でもした事ありました？」

「あつたでしょ！？」

先輩の大変珍しいツツコミである。

「冗談です。ありがとうございました」

「冗談つて、何でこのタイミングで……」

取り乱したのが恥ずかしかったのか、神山先輩は数回咳ばらいをする。顔が少し赤い。かわいい。

「全く君という奴は、もう少し僕に優しく接してくれよ。黒幕だとか、クソだとか、死ねだとか……僕だってたまには傷つくんだよ？」

憂いを帯びた神山先輩の瞳に、僕はドキツとした。危ない危ない。恋に落ちてしまうところだった。神山先輩がポニーテールだったらイチコロだった。落ち着こう僕。神山先輩は、嘔泣きが出来る程の大人の女性だぞ。騙されてはいけない。

落ち着くために、神山先輩が取った行動を、今回僕が巻き込まれるに至った経緯を、整理しよう。

まず、全ての発端は、佐々木さんの仲間が捕まった事にある。佐々木さんは捕まった仲間から情報が漏れるのを防ぐため、無条件能力者の情報を、昔仲間であつた神山先輩に教えてもらった。探偵に憧れていたという神山先輩が、どうやってその情報を手に入れたのかは知らないし知りたくもないが、神山先輩は情報を手に入れた。その情報の中にはもちろん、菜月と僕の情報もあった。ここで神山先輩が、知り合いが巻き込まれるのはかわいそうだなと思って、僕達の情報だけ削除してくれればよかったのだが、神山先輩はそうはしなかった。それはそれでオモしろいとも思つたのだろう。

しかし、神山先輩にも良心という物があつたのか。削除はしてくれなかったが、改ざんはしてくれた。ここがポイントなのだが、神山先輩の情報改ざんは、『菜月の身を守る』という方向で行われた

ようだ。『結界はドアだけではなく窓にも行われている』や『同居人である兄の能力は適応難易度一の取るに足らない物である』とか。この部屋に侵入するのは大変だよ。この兄使えばいいんじゃない？と、そそのかすような情報改さん。

確かにそれは感謝してもいい事かもしれない。家に帰ってきたら大切な妹が誘拐されていたなんて、そんなのは嫌だ。それくらいだったら、僕は一度死ぬ方を選ぶ。本当だ。嘘ではない。もしかしたら命の危機にさらされた時、助けてくれるなら妹が拉致されても構わない。と、思ったかもしれないが、それは気の迷いだ。本心ではない。

世間では、そういう状況の時こそ、人間の本心が現れると言っているそうだが、そんなのは間違いだと、ここではつきりと言っておこう。異常な状況の時には異常な判断、異常な思考になってしまう。異常な判断、異常な思考が本心と言えるだろうか？否、断じて否だ。本心とは正常な判断、正常な思考の上で明らかにされるものだ。つまり何が言いたいかというと、正常な判断、正常な思考の時の僕は、菜月のためなら何度だって死んでみせる。という事だ。本当だよ？さて。そんな情報のやり取りを、神山先輩がいつしていたのかは知らないが。昨日、神山先輩は僕の記憶の欠落を知り、ついに順番が回ってきたかと思っただけに違いない。

今日くらいに佐々木さんが動く事を知った神山先輩は、警察が僕と、恐らく菜月を、囹に使うという事も知っていただろう神山先輩は、万が一に備えゴミ袋を用意し、リビングでお茶を飲んでリラックスしていた。すると僕が現れて、今に至る。こんな感じだろう。

整理してわかった事は、僕は完全に被害者であるという事と、僕が巻き込まれたのは神山先輩のせいという事。やっぱり感謝しなくてもいい気がしてきた。

「少年、どうかしたかい？」

「いや、僕は先輩に惚れる事はないなと再確認していました」

「ふふふ、口ではそう言っても、心はすでに……」

「ど、どういう意味ですか」

思わぬ切り返しに動揺を隠し切れない。何だその含み笑い。ついさつき、無意識レベルの催眠能力者に会ったばかりだから、余計不安になる。

「どという意味って少年。そういう意味だよ。何せ少年は、死の間際、僕を思い出したんだからね。いやあ困ったなあ。まさか少年に惚れられとはねえ」

「ああそういう事ですか。それは、好きで思い浮かべたんじゃないです。憎んでたから思い浮かべたんです」

「君は残酷なくらい正直過ぎるな」

僕的能力は『死んだ後に、最後に思い出した人間の前に、生きた状態で現れる』という能力だ。廃ビルで死んだ直後、僕はここに跳んだ。廃ビルに残った二人がどうなったかはわからないが、多分、遠山さんが、盾が^{ぼく}消えて驚いている佐々木さんをどうにかしただろう。そうしてもらわないと、死んだ僕がうかばれない。

『死んだ人間が生き返る』という事で、一応改変系のフィクションという事になっているが、いまいちしっくりこない。七海さんのつけた夢落ちもしっくりこない。夢じゃないわけだし。太郎君がつけたセーブもしっくりこない。セーブした覚えはない。菜月のは名前ではない。遠山さんのリセットもしっくりこない。リセットしきれてないし。神山先輩の再起動^{コンティニュー}は、まあそれっぽいかなとは思うが、当て字を使うのは何だか鳥肌が立つので遠慮している。というわけで今のところ、フィクションという事になっている。

発動条件は、走馬灯を見て死ぬ事。走馬灯を見るだけではなく、実際死ななければならぬ事が、この条件の厳しいところだ。死にかけてはダメ。死にかけたではダメ。死なないと、能力は発動しない。

社会適応難易度は一。理由は推して知るべし。

「まあいい。しかし少年の能力はおもしろいね。考えようによっては不死身じゃないか」

「何が不死身ですか。走馬灯見れなかったら、僕そのまま死ぬんですよ?」

七海さんの能力はそこを考えると、僕为天敵のようなものだ。眠った状態で殺されたら、走馬灯は見れないだろう。多分。なにぶん、試すわけにもいかないので断言はできない。

「それもそうか。さて、ずいぶんお喋りしたね。昼はどうする?」
「昼?」

そう言われてふと、今が何時か知らなかった事に気付く。まだ現実に戻りきつてはいないようだ。

壁かけ時計を見ると、なるほど、昼食にはいい時間だ。というか。
「先輩、学校は?」

「サボりさ。君もだろ?」

誘拐された場合もサボリに入るのだろうか。誘拐証明書を発行してもらえば、欠席はなくなるのか。気になるところだ。というか鞆どこだ。

学校という日常の事を思い出したからだろうか。菜月の事が心配になった。ポケットを探ると携帯を発見した。電源は切られているが、壊されてはいない。佐々木さん、素晴らしい。

「……うわ」

電源を入れると、メール数件、着信あり数十件と表示された。携帯が鳴らない日の方が多い僕としては、恐怖すら感じる。

先にメールを確認すると、『お兄ちゃん大丈夫!?』的な菜月からのメールと、『今日休むのか?』的な太郎君からのメールがあった。8:2の割合だ。

メールを確認にしていると着信。菜月からだ。耳から離して、出る。

「もしも」『お兄ちゃん!?!?』

セーフ。僕の鼓膜は守られた。

『警察の人が来て私誘拐されるとか言ったと思ったらやっぱりお兄ちゃんでお兄ちゃん誘拐されたって言うてそれで遠山さんが来て大

丈夫！？』

「落ち着け菜月。死んだけどもう僕は大丈夫だ」

『お兄ちゃん死んじゃったの！？』

しまった。さらに混乱させてしまった。わざとではなかったんだけどなあ。

『あ、ちよ、ロリコ』あー、各務君？俺だけど』

電話の向こうでどたばた音がした後、相手が代わった。

「遠山さん？」

『そうだよー。強盗と拉致の凶悪犯罪者を捕まえた超優秀な遠山亮とは俺の事だ』

「僕を躊躇なく殺した遠山さんが何でそこに？」

『ちよ……きつい事言っなよ。後で謝礼するから許せて。ここにいる理由か？そりゃ、一段落したから、各務君に謝りに来たわけだけど。菜月ちゃんの前に出なかつたのお前？どこに出たの？』

「か」「少年。社会の底辺と喋ると君も引きずられてしまうよ」

そう言っつて、神山先輩は僕の手から携帯を奪い「死ね」と携帯に呟いた。そして電源を切り、そのまま携帯を自分のポケットの中に「っつて、返して下さいよ」

「ダメダメ。少年をまだ帰すわけにはいかないよ。今から君には僕の手料理を食してもらうんだからね」

「先輩の手料理ですか？」

心ときめくフリーズである。まあ別に、先輩の手料理食べてから帰ってもいいかな。菜月にはもう少し心配していてもらおう。そんな風に思ってしまうほど、ときめくフリーズである。

「そうだよ。今朝テレビを見ていたら、ふと料理をしなくなっつてね。今まで一度も思っただ事がないのに、だよ？そんな日に君が僕の元に現れるとは。これは運命かもしれない。安心したまえ。失敗してもいいように、材料はたくさん買ってきてあるからね」

「……」

おや、今、そうですかじゃあいただきますね。と、答えるのに躊

踏してしまう部分があったような。

「……先輩。先輩は、料理とか、するんですか？」

「全くしたことないけど」

「……大丈夫なんですか」

「ん？大丈夫に決まってるだろ？料理なんて簡単だよ」

「……手伝いましょうか？」

「男はキッチンに入らないの。君はそこで待つてなさい」

中毒死でも走馬灯は見れるだろうか。

包丁を逆手に持ち「少年に今だかつて食べた事がないような、ピ
ーフストロガノフを見せてあげよう」と、楽しそうな神山先輩を見
て僕は思った。

ああまさに。一難去つてまた一難。

8・主人公（再起動）（後書き）

これにて一段落。

説明的な章は終わり。

感想お待ちします。

これ以降は気長にお待ち下さい。

主人公ノート（用語説明）（前書き）

設定資料集です。

読まなくてもいいです。メモメモ。

こんな設定で行きたいなあと思ってます。

なんかおかしいなあという点がありましたら、感想かメッセージか拍手でよろしくどうぞ。

5 / 8 訂正。超能力者数『千人』 『一万人』 実験都市人口『一万人弱』 『二万人弱』

主人公ノート（用語説明）

・超能力ちようのうりよく

超能力。一般的な人間には出来ない特殊な能力の事。現在では、脳の三ヶ所を同時に刺激する事により、発現することが可能となっている。超能力を使える者を、超能力者と呼ぶ。現在、一人に近い超能力者が存在するが、その多くが、この実験都市で生活しているらしい。

・超能力実験ちようのうりよくじっけん

超能力プロジェクトともいう。科学的に超能力者を作り、超能力の研究をしようという実験。約十年前から始まっている国家的プロジェクト。お偉いさん達は、巨額のマネーを投資し、その原理、社会に与える影響等を、様々な方法で調査している。現在は、最終段階、『社会実験』に入っているらしい。

・超能力系統ちようのうりよくけいとう

星の数ほどあるのではないかという超能力を、大雑把に分類するために作られた項目。科、的なもの。数々の実験やら検証の結果、現在は『催眠系統』『精神感応系統』『身体能力強化系統』『改变系統』『操作・移動系統』『干渉系統』の六つだが、これから減ったり、増えたりする可能性もある。超能力者数は『催眠系統』>『精神感応系統』>『身体能力強化系統』>『改变系統』>『操作・移動系統』>『干渉系統』

・超能力名ちようのうりよくな

超能力の名称。超能力系統から、さらに細かく分類するために作られた項目。公式・一般的に使われている名称と、個人でつけて使っている名称の二つが存在する。例）『フィクション』『勇者』

『フィクション』に関しては、名称が同じでも起こる現象が違う物が多く、個人でつけることが多い。また、名称から系統に繰り上げられることもあり、『催眠』は、最初は名称に分類されていた。『フィクション』は系統に近々分類されるのではないかという話もある。

・超能力使用条件
ちようのつりよくしよつじようけん

超能力発動条件ともいう。その名の通り、超能力を使うための条件。能力が同じでも、使用条件が違う場合もある。なぜこんなものがあるかは今だわかっていないが、強い能力になるほど、条件が厳しい傾向にあることから、何らかの（脳、もしくは世界の？）抑制機能ではないだろうかという説が有力らしい。

・社会適応難易度
しやかいてきあつなんいど

一般社会に適応できる難しさを、五段階で表す物。能力や超能力者のパーソナリティによって、設定されている。強い能力、危険な人間ほど、難易度が上がる傾向にあるため、危険レベルとも呼ばれているが、強い能力になればなるほど、使用条件も厳しくなるため一概に、強い能力ならレベルが高いというわけでもない。ただし例外的に、無条件能力者の場合は、どんな能力、パーソナリティでも五に認定される。

・無条件能力者
むじようけんのつりよくしや

本来あるはずの超能力使用条件がなく、ずっと超能力が発動している状態の超能力者のこと。いつでも使えるのではなく、いつも発動しているという事を間違えてはいけない。無条件ではなく、常時条件をクリアしているのではないかという説もあるが、確かめる方法はないため、定かではない。常時超能力が発動してしまうため、無償権能力者の生存確率、社会復帰は難しいため、その数は公式発表では少ない。

また、無条件能力者の中でも、菜月のように、『視界に入ったもの』という条件らしきものがあるものもいるため、厳密に言えば、無条件というわけでもないのかもしれない。

・多重能力者
たごうのつりよくしや

複数の系統の超能力を持つ能力者のこと。『同時に使えない』や『Aの能力を何分間使用した後、Bの能力が使える』等、独特な条件があるため、一概に、優れているとはいえないらしい。

・催眠系統
さいみんけいとう

超能力系統の一つ。属する能力は『催眠』『簡易催眠』『強制睡眠』『再体験』等、催眠が主である。『有機物の精神に指示を与え、コントロールする』能力が、ここに含まれ、過去、精神感応系統に含まれていたこともあり、精神感応系統と似ている。その指示の与え方、与えられる量、レベル、与えた相手の実際の行動方法等で、能力名が変わり、社会適応難易度も変わってくる。多くの場合、使用条件に『氏名』『生年月日』『接触』が含まれる。

・精神感応系統
せいしんかんおうけいとう

超能力系統の一つ。属する能力は『読心術』『過去視』『嘘発見器』『想起』等、『有機物の精神を読み取る』能力が、ここに含まれる。特徴としては、社会適応が一番しやすい系統と言われており、適応難易度は低い場合が多い。つまり逆にいえば、この系統で高ければ、パーソナリティに問題ありという事だろう。多くの場合、使用条件に『氏名』『生年月日』『接触』が含まれる。

・身体能力強化系統
しんたいのつりよくきやうかけいとう

超能力系統の一つ。属する能力は『瞬発力強化』『筋力強化』『視力強化』『味覚強化』等、『身体能力を強化する』能力が、ここに含まれる。この系統の特徴といえば、長時間の連続使用が出来

ないことが多いという事だろうか。多くの場合、使用条件に『信じること』『努力すること』等、精神的な物が含まれるのも、特徴といえる。

・ 改変系統 かいへんけいとう

超能力系統の一つ。属する能力は『フィクション』『重力操作』『靈視』『透視』等、『現実を改変する』能力が、ここに含まれるということになっているが、どうも、まだよくわかっていないものをつめこんでいる系統な気がしてならない。『その他』みたいなもの。恐らく、これから先、この系統に含まれている能力は系統が変わったり、名称が変わったりするだろう。特徴としては、奇妙な能力が多く、使用条件も人によって変わりやすいこと。

・ 操作・移動系統 そつさ いどうけいとう

超能力系統の一つ。属する能力は『瞬間移動』『念動力』『取り寄せ』『発火能力』等、『有機物・無機物を、移動・操作する』能力が、ここに含まれる。これといった特徴なし。多くの場合、使用条件に『経験』『時間』が含まれる。

・ 干渉系統 かんしょうけいとう

超能力系統の一つ。属する能力は『未来予知』『時間跳躍』『物質催眠』『確立操作』等、『無機物・目に見えない物に、干渉する』能力が、ここに含まれる。この系統の超能力者が最も少なく、大変貴重であり、社会に与える影響も大きい。そのせいか、使用条件は厳しくなっており、そう簡単に使えない。この系統の無条件能力者を、僕は見たこともないし知らないが、もしいたとしたら、一生研究所暮らしだろう。多くの場合、使用条件に『代償』が含まれる。

・ 第 世代（だいぐうせだい）

いつの実験で、超能力者になったかを表すもの。現在は第十一世

代まである。世代によって特徴的なものがあるが、一般には公開されてはいない。なお、実験が約十年前から始まり、今現在十一世代まであるわけだが、一年目が一世代、二年目が二世代、というわけではない。

・実験都市^{じっけんとし}

『社会実験』を行なうためにお偉いさんが、ある土地を買い取り、作り上げた都市。東西が山に囲まれ、南から北に川が流れている盆地。人口は二万人弱、面積は80平方キロメートル弱。人口の約半数が、超能力者ということになる。市全体が、観察実験の場となっており、ありとあらゆる場所に監視カメラが仕掛けられている。防犯用の監視カメラは別に仕掛けられており、実験用の監視カメラに写る範囲で犯罪を行なったところで、よほどの事がない限り、警察に通報されることはない。その犯罪も、『社会実験』にとつては有益なデータだからだ。『よほどの事』とは、『人命』にとつてではなく、『実験』にとつてというのがいやらしい。そういう事以外は、一般的な都市と似たようなもの。

実験都市に来るのは特に許可なく出来る。電車がベター。だが、出るのには審査が必要となってくる。適応難易度が四以上だと、厳しい。

・パーソナリティ仮説

脳の同じ場所に、同じ刺激を与えるにも関わらず、被験者によって、発現する超能力が違う理由は、被験者のパーソナリティが違っているから。という、仮説。この仮説が正しければ、処置を施す前に、被験者のパーソナリティを変化させることにより、作為的に能力者を作り出すことも可能となる。

新しい仮説であり、一般にはまだ公開されていない。間違っている気もするので、もしかしたら神山先輩が嘘をついているか、神山先輩独自の仮説かもしれない。

・パーソナリティ要素

パーソナリティ仮説が本当にあるとしたら、社会適応難易度と並んで、存在するであろう項目。脳に処置を行なう前にやった、数多くの心理検査、体力テスト等を、複合的にどうにかして、抽出した新たなパーソナリティ要素を使い、この要素が多いと催眠系統になり、この要素があると絶対に改変系統にはならない。という使い方がなされるに違いない。そういう差が実際にあるかどうか、そういう分類が本当に出来るかどうかを調べる実験が、神山先輩の言うとおりなら、現在行なわれていると思われる。

・常々思う疑問。

諸外国の反応がない。本当はあるのかもしれないが、僕が知れる範囲では一切ない。超能力なんて、飛びつきそうなものだが。

超能力を発現する方法を生み出した科学者と、その娘『始まりの超能力者』がメディアに全く出てこない。というか、名前さえ発表されていないのはおかしい。

そして、そういう事に、無関心な人間が多い。特に、超能力者となった人間は。

間違いなく何かある。気になるが、藪の中に行き蛇に襲われたくもないし、虎穴に入ってまで虎子は得たくないし、神に触ったりして崇められたくもないので、気にしない事にする。

1・超能力娯楽施設（ターン制バトル）

「各務、これから暇か？」

放課後。教室で僕が来週あるテストのために、ノートをまとめていると、太郎君がやってきた。

「暇といえば暇だけど」

テスト勉強はどうしてもしなければならぬものでもない。

「そうか。じゃあ、ちよつと付き合ってくんね？行ってみたい遊び場があんだよ」

「遊び場？あまり遅くならないならいいよ」

帰りが遅くなると、菜月が餓死するから。

「そうこなくっちゃな。行こうぜ相棒！俺の奢りだ！」

相棒になった覚えはないが、奢りというのは大変嬉しい。「うわー、太郎君カッコイイ」と、おだてておく。「いやー、それほどでもないぜ！」本気にしているような太郎君、いつまでもそのままの君でいて欲しい。

僕達は太郎君のオススメ遊び場（どんなところは着いてからのお楽しみらしい）に、徒歩で向かっていった。自宅マンションとは反対方向、駅前付近にあるらしいので、高校から道を下っていく。

「そういえば太郎君、部活はいいの？」

太郎君は放課後、ボクシング部で最強を目指すのが日課だったはずだ。熱心にひたむきに最強を目指す彼は、部内では『中二の太郎』と呼ばれているらしい。本人が気に入っているようなので、僕から言うことは何もない。

「部活は今、活動禁止何だよ。つまんねー」

「ああ、そうか。テスト期間は休みか」

自分は部活をやっていないから、うつかりしていた。

「それもあるけどな、また別の理由で、あ、ここだここ」

別の理由を言うのを途中でやめ、太郎君が立ち止まったのは、駅前大通りから外れた場所に、ひっそりと立っているビルの前だった。「ここ？　なんか、遊ぶ場所には見えないんだけど……」

自動ドアから見えるビル内と、窓の配置からして、五階建て。一階は受付のような感じだろうか。高さは一般的な五階建て程度、横幅は……ドジボールのコートくらい。このビル内に、何か遊べるような施設があるとすれば、雀荘とか、ちよつと大人なものくらいしか想像出来ない。看板とか何もないし。いや、あった。見えづらいつとこにネームプレートがついている。そこに書かれていた文字は「四天王の館？」

「そう。ここが最近一部の情報通の間で話題になっているエスパ―エンターテイメントパーク。四天王の館だー！」

太郎君が腰に手をあて、どや顔でそう言った。なるほど、エスパ―エンターテイメントパークなら納得だ。

エスパ―エンターテイメントパーク。EEP。超能力娯楽施設。

その名の通り、超能力を使用して楽しませる施設の事だ。

超能力の社会利用については、娯楽に関しても研究が行われている。フィクション能力を使えば、ゲームの世界を楽しめるだろうし、催眠を使えば、今までにないリアルなお化け屋敷も出来るだろう。

新しい娯楽の提供、超能力を使えば施設を作る手間が省け、コスト面や場所に関して等、メリットはとても大きいが、安全性がまだ怪しいというデメリットもある。というわけで、要研究対象。実験都市にはデータを取るために、エスパ―エンターテイメントパークが作られており、ここもその一つなのだろう。僕はあまり興味がないのでよく知らないが、確か学校の近くに、お化け屋敷もあったはずだ。七海さんが、マジやばかった。と言っていた気がする。

「このビルはさ。定期的に中の出し物が変わるんだよ。貸し出してんのかな。で、今入ってるのがなんかすげえ難しいゲームタイプらしくてさ。これは挑戦せずにはいられねえ！と、思ったわけさ」
「なるほどね」

ゲームタイプというのはどういうタイプか想像しにくいけど、恐らく体を動かすタイプの娯楽だろう。太郎君は好きそうだな。

「でも、それなら部活の友達と来た方がよかったんじゃない？」

僕は運動が苦手というわけではないが、部活に入っている人より得意ではない。

「それがだな、各務。聞いて驚くなよ？ 詳しい内容は言えないらしいんだが、どうやらこの施設は最上階まで行けばクリアらしいんだがな。ボクシング部のメンバーのほとんどは、クリア出来なかったわけよ。わかるか？ つまりな。この、四天王の館は、体力だけじゃクリアできねえってわけだ！ ワクワクしてくるだろ！？」

ちよつとどの辺がワクワクしてくるのはわからなかったが、なるほど、運動だけではなく、知力も必要という事で、僕を連れて来たのか。太郎君の成績は下から数えた方が早いけど、僕の成績は上から数えた方が早い。

「よし！ んじゃあ行こうぜ相棒！ 俺達の力で、四天王の館をクリアしてやろうぜ！」

「そうだね」

太郎君のテンションの高さについていけるか、少し不安だが、まあ楽しそうだな。楽しもう。

ビル内に入ると、正面に映画館のチケット売り場のような物が設置されていた。左手にはエレベーター。『故障中』という紙が貼ら

れているので、故障中なのだろう。その横にソファと机が置かれている。待ち合い室的な役割もあるようだ。管理人室の奥にまだ道があるようなので、恐らくそっちに階段があると思われる。

「ようこそ、四天王の館へ」

何故か鏡で仕切られた向こうから、声がした。男性……いや、姿が見えないので確証は持てないが、なんだか、こう、声が若い。雰囲気を出そうと変声期前の男の子が頑張っているような声にも聞こえた。

「お二人か」

あちらからは見えているようだ。マジックミラーか、それとも天井にある監視カメラのどれかが、このビルの監視カメラなのか。

「おう、二人だ。問題あるか？」

「ない。お一人千円。それとこれに記入を」

書類が四枚とペンが二本、仕切りの向こうから差し出された。少し見えた手は、子供の手だった。子供がやってるのか？

ソファに座り、渡された書類に目を通す。隣で太郎君が「めんどくせえー」と、ぼやいているが、一枚は誓約書で名前を書くだけ。もう一枚は少し書くところが多いが、さほど面倒なものでもない。

誓約書の内容は、要約すると。『このEEPで怪我とか犯罪があっても当社は責任を取りません』『このEEPであった事は口外しません』『同意するならサインして下さい』という事だ。怪我する可能性を匂わせているが、ここは色んな人に貸し出しているので、その為の予防だろう。本当に危険があるわけではないと信じたい。口外するなというのは、『色々な仕掛けをくぐり抜け最上階を目指せ！』という類いの施設のようなので、ネタバレ禁止という事だろう。何はともあれ、同意しないと遊べないのだから、同意せざる終えない。太郎君がすでにお金も払ってしまったし。『佐藤各務』と記入する。

もう一枚は個人情報の記入用紙。これは、エスパニアミューズメントパークのデメリットの一つだ。超能力を使用する施設で遊ぶた

めには、超能力者が使用条件を満たさねばならない。その使用条件に個人情報が含まれるなら、個人情報を教えないといけないのだ。

書く項目は『氏名』『誕生日』『血液型』『超能力者である場合は超能力名』『持ち物』の、計五つ。氏名や誕生日、血液型や超能力はわかるが、持ち物？ 変な項目だ。氏名『佐藤各務』『誕生日』『四月四日』『血液型』『A B』『超能力名』『フィクション』『持ち物』『鞆』『携帯』『財布』と、書いておく。

「書けた？」

「おう。なんとかな」

太郎君が書いた用紙をちらつと見ると、超能力名の欄を事細かに書いていた。そこまで書かなきゃいけないのか？ それなら面倒だ。ダメだったら僕も書き直そう。

「書けたぜ」

書いた書類を受付に出す。しばらく経ってから「よろしい。奥の階段へ進め」と、言われた。やはり階段は奥か。

並んではあるけないような狭い通路を進むと、階段の前にトイレがあった。『トイレはここにしかないので、すましておきましょう』という貼紙がある。

「ちよつと寄つてくわ」

「了解」

太郎君がトイレに行くとの事なので、待っている間に、ちよつと先を見ておく。階段も通路同様、狭い。

「いやー、スツキリしたぜー」

いらない報告をしながら戻ってきた太郎君を先頭に、二階へ向かう。

「あん？何だこりゃ」

「……鏡か」

二階につくと、不思議な事に三階へ続いているであろう階段がない。鏡で塞がれている。

「よくわからんが、となるとこつちだな」

階段がないなら二階を探索するしかない。左手に窓、右手にコンクリート、行き止まりにエレベーターが見える廊下を進むと、すぐにドアを発見した。ドアには、『第一の間：デュエルを受けるなら入れ』という貼紙が。

「どういう意味だ？」

「さあ？デュエル。決闘の事じゃない？」

「決闘あ？よくわからんが、とりあえずここが第一ステージっぽい事だよな」

太郎君はニヤリと好戦的な笑みを浮かべ、「準備はいいか相棒？」と聞いてきた。僕は軽く「おっけーだよ」と返す。

「よーし！んじゃまっ！第一ステージくらい、かるーく突破すっか！」

太郎君はそう言って、ドアを開けた。

それ、フラグにならないといいなあ。と思いながら、僕も後に続いた。

「やあお兄ちゃん達、遅かったね。待ちくたびれちゃったよ」

室内は、コンクリー打ちっぱなし。絨毯くらい敷けばいいのに。

広さは……やはりドッジボールのコートくらいか。ドアは今入ってきた一つだけ、備品は事務デスクが部屋の中央に一つだけ。そのデスクに、野球帽を被り、ウェストポーチをつけた、小学二年生くらいの男の子が座っていた。さあこれから楽しい時間が始まるぞ。という期待に満ちた笑顔を浮かべて、足をブラブラさせている。やっぱりこの出し物、子供がやっているようだ。いいのか？

「ガキかよ。お前がこの部屋の主か？弱そうだな」

ニヤニヤと笑いながら太郎君が挑発する。楽しそうだなー。

「弱そう以外はあつてるよお兄ちゃん。そう、僕がこの部屋の主、四天王の一人、ノームさ」

子供はそう言って、デスクから飛び降りて、どや顔。ノーム君か。うん、まあ、子供だからいいんじゃないかな。

「そうか。俺は山田太郎。お前を倒す男だあ！！」

太郎君、ノリノリである。

「ふふふ、バカそうなお兄ちゃんはやっぱバカっぽいね。でも、僕はそういうお兄ちゃんが大好きだよ」

「おい各務。今、俺、バカにされてね？」

「気のせいじゃないかな」

「そうか。で、ノーム。ようはお前を倒せば次の階に行けるって事だよな？何すんだ？まっ、どんな勝負でもガキには負けねえけどな」
「バカっぽいお兄ちゃん。確かに僕はお兄ちゃんよりチビだし年下だけど、超能力があれば、そんなのどうにでもなるんだよ！」

子供、ノーム君はそう叫び、野球帽のつばを後ろに回した。そして、さつき太郎君が浮かべたような好戦的な笑みを浮かべ、「さあ！デュエルだ！」と、宣言した。

その瞬間、部屋が闇に包まれた。

「うお！」

太郎君が驚きの声をあげた。僕も声はあげないまでも、息をのんだ。

電気を消し、カーテンを閉めた程度では生まれない暗さ、まるで太陽がない宇宙のような闇が広がっている。天井も壁も、床さえも視認できない。床を踏んでいる感触がなければ、自分が宙に浮いていると錯覚してしまいそうだ。

しかし不思議な事に、そんな闇に包まれているのに、隣にいて驚いている太郎君の顔はしっかり見えるし、僕達が驚いている姿をニヤニヤと見ているノーム君の顔もちゃんと見えるし、その後ろにあるデスクもくつきり見える。この能力はまさか……。

「そっちのお兄ちゃんも落ち着いてるね。なら、そろそろ見えるんじゃないかな？」

「……これは」

ノーム君の言った通り、見えた。僕の左前方に、青地に白字で『たたかう』『とくぎ』『もちもの』『にげる』と書かれた……そう、まるでRPGゲームに出てくる、『ウィンドウ』のような物が浮い

ていた。手を伸ばし、『たたかう』に触れてみると『たたかう』の横に新たに『はたく』『ける』の項目が現れる。手を離すと、その項目はなくなる。

という事は天井付近にもあるだろうと思い、上を見れば『のーむのターン』と書かれた『ウインドウ』が浮いている。そして体を動かそうとするが、手を伸ばし、上を向いたり体の向きは変えられるが、その場から動く事が出来ない。間違いない。これはあれだ。

「改変系統フィクション『ターン』か」

「ピンポンピンポンピンポン！大正解！頭良さそうなお兄ちゃんはやっぱり頭がよかったみたいだね！」

正解と笑うノーム君の頭の上に、『ゲージ』が浮かんでいる。横で「うお！何だこれすげえー！！」と、興奮した様子で自分の『ウインドウ』に触ってる太郎君の頭にも同じ物が。見えないが、僕の頭の上にもあるだろう。どうやら第一ステージは『ターン制バトル』の様だ。

『行動をターン制にする』それが改変系統フィクション『ターン』の能力。この能力を使うと、人は順番にしか行動出来なくなる。ノーム君の能力はさらにそこに、『バトル』というのが加わっているようだ。条件は個人によって変わるから確かな事はわからないが、『許可を得る』『個人情報』の二つ、後もしかしたら、あの帽子を逆にするのも条件かもしれない。

「……なるほど」

『もちもの』の項目に触れてみると、『鞆』『携帯』『財布』という項目が出た。どうやら受付で書いた『持ち物』は、このためだったようだ。『鞆』に触れると『から』と表示される。もちろん実際は『から』ではないが、僕が持ち物として書かなかったので、ノーム君が鞆の中身を僕の『持ち物』と認識していないので、『から』になっているのだろう。

『とくぎ』は超能力の事のようにだ。『ふいくしょん』と表示される。しかし文字色が灰色。使えないという事だろう。これは、僕が

ちゃんと書かなかったからか、それとも使用条件をまだ満たしていないからのどちらかだろう。

「お兄ちゃん達、そろそろわかってきた？何か質問とかある？」

ないなら始めようか。と、ノーム君が言う。

「つまりこれはあれだろ？ お前のHPを零にしたら勝ちって事だろ？」

「そうだよバカっぽいお兄ちゃん。何か不満でもあるの？」

「不満？あるさ。ありまくりだ。こっちは高校生二人、そっちはガキ一人。これはちよつと俺達に有利過ぎねえか？」

有利なら別にいいだろうに。太郎君、君って奴は。

「ふふふ、甘いねえバカっぽいお兄ちゃんは。ドーナツよりも甘いよ！安心しなよ。全然お兄ちゃん達は、有利じゃないからね！！」

ノーム君はニヤリと笑い、「僕のターン！僕は持ち物から、キラーを召喚！！」と、高らかに叫びながら、ウエストポーチから、小さな人形を放り出した。上の『ウィンドウ』に『ノームは キラーを しょうかんした』と表示された。

放り出した人形はクルクルと宙を舞い、ノーム君の横に落ちる。

そして「立った！？」勝手に立った。

「どうだいバカっぽいお兄ちゃん！これで二対二だよ！！」

太郎君のナイスリアクションに気をよくしたのか、上機嫌なノーム君。その横では、立ち上がった二十センチくらいの小さな、何だろうあれは……『包丁を持った緑色のペンギン』みたいな人形が、フラフラと体を揺らしている。とりあえず、怖い。どうやらこの『バトル空間』では、持ち物に特殊な能力がついているようだ。試しに『もちもの』から『携帯』を選択してみると『なかまをよぶ』と表示された。なるほど。いざとなったら迷いなく遠山さん呼び、脱出しよう。

「さあ！バカっぽいお兄ちゃんのターンだよ！！」

ノーム君が言う通り上の『ウィンドウ』に『やまだたろうのターン』と表示されている。これ、順番どうやって決めてるんだろう。

というか、流れで始まってしまったが、始まる前に大事な事を聞きたかったんだけど。答えによっては、今すぐ『にげる』か『なかまをよぶ』を連打したい。

「ノーム君、一つ」

「よっしゃ俺のターン!!」

「かかってこいバカっばいお兄ちゃん!!」

「……」

僕のターンはまだのようだ。

「いくぜえええ!!」

太郎君の姿が、掛け声と共に消えた。と思っただけでノーム君の前にいた。

「っ!!」

「おららららららあ!!」

驚き硬直したノーム君に、太郎君は容赦なく空中コンボを決めた。そういえばこのゲーム、『防御』という項目がない。喰らうしかないのだろうか。もしそうなら、やだなあ。

「よっしゃあ!!」

太郎君がやり切った。という表情で戻ってきた。上の『ウィンドウ』に『やまだたろうは だっしゅあんどらっしゅを つかったのーむに 30コンボあたえた のーむは 80のダメージを うけた』と表示された。ダッシュ&ラッシュか。『とくぎ』を使ったのかな。

「くっ……バカっばいくせに、なかなかやるね……バカっばいお兄ちゃん」

ノーム君が、膝をつきながら、苦しそうな表情を浮かべている。頭上の『ゲージ』が八分の一程度減っているところを見ると、マックスHPは100か。どうやって決めてるんだろう。

「ノートがなかったら、即死だったよ……」

ニヤリと笑い、ノーム君は懷からノートを一冊取り出した。えー、どういう事だよ……と、僕は思ったが「道理で変な感触がしたと

思ったぜ。なかなかやるな」太郎君はノリノリである。

「次は……」

誰のターンだろうと思っていると『キラールのターン』と表示された。まあ、妥当な順番か。

キラール、つまり人形はフラフラとその場で体を横に揺らして「！？」いたと思つたら眼前に浮かんでいて包丁を僕の目に突き刺そうとして　！？

「各務！大丈夫か！？」

「なんとか……少し切ったけど」

「切ったつてお前……」

「大丈夫だよ。舐めとけば治るさ」

眼球を突かれていたら、その程度では済まなかっただろうけど……。

嫌な汗をかいた。ギリギリのところで、手で人形を弾く事に成功したが、危なかった……。フェルトで出来たぺらぺらな包丁は、この空間では危険物のようだ。人形を弾いた時、布と綿で出来た人形とは思えない重量を感じたし、包丁に当たった手の平を少し切ってしまった。血が滲んできているが、まあすぐ止まるだろう。

僕に攻撃してきた人形は、いつの間にかノームの横で、先程同様、何事もなかったように体を揺らしている。寒気がした。

『キラールは　わーぷをつかった　さとうかがみの　カウンター　キラールの　こうげきは　しっぱいした　キラールに　20のダメージ　さとうかがみに　1のダメージ』

「頭が良さそうなお兄ちゃんもなかなかやるね。さあ、そっちのターンだよ！」

ノームは今の出来事を、何も気にしていないようだ。この遊びが楽しくて楽しくて、早く続きをやりたい。そんな笑顔を浮かべている。

僕は全く楽しくない。身の危険を感じているからだ。太郎君からも、さっきまでなかった緊張感が伝わってくる。しかしその緊張感

は、楽しくなつてきやがったという、僕とは真逆の緊張感だ。

「……ノーム君、一つ聞きたいんだけど」

「何かな頭が良さそうなお兄ちゃん」

「このゲームで負けたり、怪我すると、どうなるんだい？」

重要な事だ。HPが零になったらどうなるのか。まさかとは思うが……死んだりしないよね。

「別にどうもならないよ。負けたら帰ってもらうだけ。怪我は、んー……特殊なの以外は治るから平気平気。そんなの気にせず楽しもうよー！」

ケタケタ笑っているところ悪いがノーム君。それはつまり、特殊な怪我はこのゲームが終わっても治らないという事かい？

『さとうかがみのターン』

「……」

よし、僕のターンか。僕は迷わず項目「おい各務。逃げるなよ」

『にげる』を選ぼうと思ったが、太郎君に止められた。

「確かにちよつとやべえかもしれないねえが、やられる前にやつちまえばいい。勝ちやあいんだ、勝ちやあ」

「しかし太郎君。第一ステージからこの危険性。僕はもう逃げたい気持ちでいっぱいだよ」

「敵に背を向けるというのかー!!」

「そうだそうだ！情けないぞ頭良さそうなお兄ちゃん！」

「……はあ」

太郎君とノーム君のノリに、僕はついていけそうにない。ないが、仕方ない。逃げるのはやめておこう。確かに太郎君の、やられ前にやる。勝てばいいというのも一理あるし、何より僕のお金ではないが、千円払ったのだ。第一ステージでやめるのは、何だか、損した気分になる。

「仕方ない……」

僕は『はたく』を選択し、ノーム君に向かって駆け出す。駆け出すが「遅いよ頭良さそうなお兄ちゃん!!」その速さはさっきの太

郎君や人形のように速くはない。ノーム君は余裕で防御の体勢を取ったが、甘い。ボディを守っているが、それでは顔面、特に頬はがら空きだ。

「っ!!」

僕は左手で思いきり、ノーム君の頬を『はたいた』。ノーム君の小さな体が、横に吹っ飛び、横でフラフラしていた人形を押し潰す。『さとうかがみのはたく クリティカルヒット! のーむに 50 ダメージ キラーに 30ダメージ のーむは やられてしまった!』

『ウィンドウ』にそんな表示がされたと同時に、『ウィンドウ』が、ふつ。と消えた。そして、ぱつ。と、部屋内が明るくなった。いや、明るくなったんじゃないよ、元に戻ったのか。闇ではなくない、天井や壁、床のコンクリートの無機質さが何だか懐かしい。実際は十分も経っていないと思う。

「大丈夫かい?」

床に倒れこみ、ピクリともしないノーム君に声をかける。

「……痛いし大丈夫じゃないよ、頭良さそうなお兄ちゃん。まさかひつぱたくなんて……」

ノーム君は頬を摩り、涙目だ。少し罪悪感がある。

「殴るよりはいいかなと思ってね」

「確かに殴られるよりはいいけど……ああ、ビックリした。ひつぱたくなんて。普通は殴るんだけど、頭良さそうなお兄ちゃんは優しいお兄ちゃんだったんだね」

ノーム君はそう言っ、笑ってくれた。気にしていない様子だ。一安心。

ノーム君の話によると、『たたかう』の項目は普通『なぐる』『ける』らしい。だからノーム君は、ボディを守った。小学生の顔面を殴ったり蹴ったり出来る人間は、少ないからだ。まあ、太郎君は能力を使ったのでフルボッコにしていたが。

しかし僕は何故か『はたく』だった。はたくなら、顔だ。という

わけで、ノーガードの顔面にクリティカルヒット。ラッキーだった。
「その人形は、もう動かないんだよな」

近づいてきた太郎君が、人形を足で示しながら聞く。人形は人形らしく地面で倒れている。立ち上がったたり、揺れたりしない。それでいい。

「うん。キラーは僕の召喚獣扱いだからね。僕がやられちゃったら終わり。もう動かないよ」

「そうか。つまり、俺達の勝ちでいいんだな」

「うん。やるねお兄ちゃん達。僕の負けさ」

負けを認めるノーム君の表情は、悔しいという感じではなく、清々しい、楽しかったという明るい表情だ。

「やったな各務」

「そうだね」

太郎君とハイタッチ。そして何故か腹部を小突かれた。「何で？」
「最後の一撃を取られたのが、ちよつとしゃくだったんだ。すまんな」

すまんなって……太郎君、器が小さいよ。

「で、ガキ。次はどうすりゃいいんだ？」

「次は三階に行けばいいんだよバカなお兄ちゃん。そのくらいわかって欲しいなあ」

「おい各務。殴っていいよな」

「いいかもね」

太郎は、ノームに、ゲンコツをくらわせた。

「いたっ！ひどいよお兄ちゃん！」

「バカめ！！敗者は勝者に何をされても文句は言えねえんだ！悔しかったら勝つしかない！それが現実！わかったか！ハーツハツハツハツ！！」

太郎君は高笑いしながら、かつこよく？去っていった。しかし言ってる事は悪役っぽいぞ太郎君。そして大事な事を聞き忘れているぞ。

「ノーム君、三階ってどう行くんだい？」

階段もないし、エレベーターも故障中じゃ行きようがない。

「階段で行けるようになってるよ」

帽子のつばを前に戻しながら、ノーム君がそう教えてくれた。

「鏡は？」

「もうないよ」

ノーム君はデスクに飛び乗り、ニヤリと笑った。何だその笑み。

まあいいか。「各務ー！早く来いよー！」と、太郎君も呼んでるし、行ってみればわかるだろう。

「じゃあね、ノーム君」

「じゃあね頭良さそうなお兄ちゃん。またね」

またね？

その言葉に引っ掛かりを覚えつつ、僕は第一の間を、後にした。

2・超能力娯楽施設（念動力）

四天王の館という、超能力を使った娯楽施設に太郎君と一緒にやってきた僕。第一の間で、四天王の一人、ノーム君とのターン制バトルに勝利し、第二の間がある三階に向かうことになった。

「お、いけるようになってんな」

第一の間があるこの二階に来たときは、鏡で封鎖されていた三階への階段が使えるようになっていた。僕たちが第一の間に入った段階で取り外したのか、それともノーム君がやられたのは確認してから（部屋内の監視カメラの一つが研究用でないなら簡単）取り外したのか。どちらにしても行動が早い。残りの三人がやったのだろっか。

狭い階段を上がり、三階へ。三階も二階同様、窓が並ぶ反対側の壁にドアが一つで、廊下の突き当たりにエレベーター。

「準備はいいよな各務？」

ドアには『第二の間』という貼紙。それを確認し、第一の間と同様な笑みを浮かべる太郎君。

「先に言っておくけど太郎君。僕はこのステージでも命の危険を感じた場合、途中退場だから。それを太郎君がわかってくれたら、準備はオッケーだよ」

「よしわかった！　じゃあ行くぜ！」

こいつ絶対わかってない。まあ、太郎君がわかっていなくてもいなくても、その場合は帰らせてもらう。

そんな決意を持ちながら僕は、第二の間に入った。

第二の間は第一の間と同じ広さだった。ドッジボールのコートくらいの部屋で、ドアの向かいの壁に窓、両側はコンクリート。天井

には蛍光灯で、隅に監視カメラ。違う点は、いる人間とある物だけだ。

「遅かったなお前らー!!」

第二の間にいたのは、ノーム君と同年くらいの男の子。やはり、小学生がやっているようだ。

秋も深まり、肌寒い季節になったというように、服装は半そで、半ズボン。その服装と、ノーム君より攻撃的な笑みを見るかぎり、がき大将タイプだろう。手には、公式ではない茶色の固そうなドッジボールを持っている。そして部屋の隅には、デジタル表示のスタンド型の、大きなスポーツタイマー。十分と表示されているが、もしかしてここの部屋では、ドッジボールでもするのだろうか。

「お前がこの部屋の敵つつー事でいいのか？」

「当たり前だろ！ そんなこともわかんねえのかよバーカ!!」

「ハハハ、生意気なガキが。つつーか、またガキかよ。これは楽勝かもしれないな。なあ、各務？」

僕は「そうかもね」と、答えた。挑発するために言ってるのか、それとも、誰もクリア出来なかったという事実を忘れて本気で思っているのか。どっちだろう。

「ハッ！ バカは本当にバカだな！ てめえら、ノームを倒したくらいで調子のとてんじゃねえぞ。あいつは四天王の中でも最弱だからなあ!!」

「な、なんだと!? あの強さでか!?」 太郎君、ノリノリだ。

「ビビッたかバカ共!! 逃げるなら今のうちだぜ！」

「ハッ！ バカはてめえだ！ この世界に、自分より弱い奴から逃げる奴がいんだよ！」

いると思うけど。

「その度胸だけは認めてやる！ 俺の名はサラマンダー！ 覚えとけバカ共！ お前らを倒す男の名だー！」

太郎君に負けず劣らず、男の子、サラマンダー君もノリノリだ。太郎君と仲良くなれるんじゃないだろうか。

しかし、サラマンダーか。一人目がノームという事で、多分そうかなとは思っていたが、やはり四精霊。残り二人は、ウンディーネとシルフだろう。とはいえ、ノーム君の能力は、『地』とは全く関係なかったから、名前に意味はそんなにあると思う。そう信じたい。なぜならサラマンダー君が、『火』。発火能力とかを使ってくるとしたら、僕は裸足で逃げ出したい。

「ふん。勢いだけは認めてやる。で、何で勝負すんだ？」

太郎君はそういう危険を一切考えていないようだ。余裕の態度で、勝負を聞く。

「まさか、ドッジボールでもやろうってんじゃないだろうな」

「お前みたいなバカにはちょうどいいだろ？」

サラマンダー君はドッジボールをクルクルと指で回して、澄まし顔だ。本当にドッジボールするんだ。

「バカにもわかるようにルール説明してやるよ！ ルールは超簡単！ 十分間この部屋を逃げ回りやお前らの勝ち！ 十分間ボールに当たらなきゃお前らの勝ち！ 十分の間に俺からボールを奪えたらお前らの勝ち！ 十分間でお前ら二人にボールを当てたら俺の勝ち！ わかったか！」

「……各務、簡単にまとめてくれるか」

「まとめるまでもないと思うけど……」

まさか、わからなかったのか。まあ、いいけど。

「ようは、十分間逃げきるか、十分の間にサラマンダー君からボールを奪えば勝ち。二人共当たったら、負け」

ドッジボールというより、動く球当てだ。動くのは僕たち。当てる側はサラマンダー君。制限時間は十分。球は、一球……。的が二つなのに、一球？

「なるほどな。こつちが攻撃出来ないのは残念だが、まっ、余裕だろ」

「ハッ。ここに来たバカはみんなそう言うんだ」

サラマンダー君は、ボールを床に叩きつけながら、ゆっくりとタ

イマーに近づいていく。そしてタイマーに手を置き、何もわかっていないバカを笑うかのような嘲笑を浮かべ、言った。

「だが、ここから出るバカはそう言わない！ みんな無言で出て行くのさ！ 悔しそうにな！ さあ、ゲームスタートだ！」 サラマンダー君がタイマーを作動させた。もう少しこちらに準備する時間が欲しかった。

「俺は好物は最後に取っておく方なんだよっ！」

サラマンダー君は、その辺、容赦がなかった。直後、僕に向けてボールを投げてきた。

こんなゲームをするくらいだ。やはりというか、サラマンダー君のボールは速い。が、まだ距離がそれなりにあるうえに、足元や肩といった、取りにくい場所ではなく腹の中心に向かってくる。運動が得意というわけではないが、これなら取れる。

「なっ！？」

と、思った僕は甘かった。僕に向かって真つすぐに、スピードを落とさず進んできたボールが、僕の少し前で、空中で止まった。ピツタリと。時間が止まったかのように。

僕も驚きで止まる。そして先に動き出したのはボールだった。空中に止まったボールは、意思があるかのようにまた動き始めた。真つすぐではなく、フォークボールのように、軌道を下げ、僕の足元に。取れるわけがない。僕の足に当たったボールは、そのまま転がることなく、ヨーヨーのようにサラマンダー君の元に帰っていった。「まずは一人つと」

余裕な笑みを浮かべるサラマンダー君の周りを、衛星のようにボールが回る。

「なるほど、サイコネシスか」

おもしろくなってきた。というように好戦的な笑みを、隣で太郎君が浮かべた。

サイコネシス

念動力。操作・移動系統の超能力。モノを自由に、手を触れずに動かす能力だ。使用条件は、手順を踏むような催眠系や精神感应系

とは違い、操るモノに対する条件が多い。例えば、『 だけ』とか『自分より小さいものだけ』とか『自分の持ち物だけ』とか『重量 以下』とか。『使ったことがある』というのは、ほぼ絶対入っているといって、過言ではない。動かせるモノの範囲によって、社会適応難易度が変わってくる。

「各務。あいつは、俺達も動かせると思うか？」

「いや、多分無理だと思うよ」

人を動かせるほどの、サイコキネシスが使える能力者は稀だ。恐らく、サラマンダー君は違うだろう。もし出来るのなら、このゲーム、勝ち目はない。

「安心していいぜ、バカ共。俺がこの部屋で操れるのは、このボールだけだ」

時間は今も進んでいる。しかし余裕の表れか。サラマンダー君は攻撃してこないで、そう答えた。

「ふん。なるほどな。各務は邪魔だから、隅っこにいてくれ。あ、アドバイスとかあるか？」

「アドバイス？ そうだね…… 多分、あのボール、初速以上の速さにはならないよ」

サラマンダー君の周りを一定のスピードで回っているボールを見て、なんとなくそう思った。彼のサイコキネシスは、『最初に与えた運動エネルギーを自由自在に操る能力』な気がする。『100』エネルギーを、『100』から『0』に、『0』から『100』に変えたり、向きを変えたりする事は出来るが、『200』にする事は出来ない。と、思う。

「…… そっちはバカじゃないみたいだな」

当たりのようだ。わざわざ当たりと教えてくれるとは。単純というか、いい子というか。ホント、太郎君タイプだな。

「そいつはいい。なら、楽勝だ」

太郎君は確信めいた笑みを浮かべた。僕も同感だ。太郎君の邪魔にならないように、部屋の隅に移動した。

「ハハハハハ！ どうしたガキ！！ 掠りもしねえぞ！！」

「クソクソクソクソー！！」

「……」

開始から六分経過し、部屋には太郎君の高笑いとサラマンダー君の涙混じりの悪態と、ボールが壁に当たる音が響いていた。

サラマンダー君のボールが、太郎君に当たる気配は全くない。太郎君の超能力が、サラマンダー君の超能力の上を行っているからだ。太郎君の超能力の一つ、瞬発力強化。この能力は、『自身の初速を上げる力』だ。スタートダッシュが速くなる能力。スタートダッシュの一步が大きくなる能力。というわけだ。短距離走なら、よほど、足の速さに差がある相手じゃなければ、太郎君が負けることはない。それに加え、ボクシングで鍛えた動体視力と、体力。正面からボールが来たら、反復横跳びの要領で、能力を使い横に跳んで避け。追ってきたら、能力を使い距離をとる。太郎君の初速が、ボールの速さより上回っている限り、このゲーム、太郎君の負けはない。というわけではない。サラマンダー君が、もう少し頭を使ってボールを操れば、太郎君を追い詰めることも出来ただろう。しかしどうやらサラマンダー君、作戦とか考えずがむしやらに行動するタイプらしく、真っすぐ飛ばし直前で方向転換。当たらなかつたら追尾。というワンパターンしかしてこない。鬼ごっこだ。

さらに、サラマンダー君。まだ能力のコントロールがうまく出来ないのか。大きな進路変更（急降下や急上昇）をする時、絶対止める。あれは、致命的だ。

「何で当たらないだよー！！」

サラマンダー君は焦りと苛立ちからか、最初よりもボールの動きが雑になってきていた。太郎君が避けた後も追いかけて、そのまま壁にボールが当たることが多くなってきた。壁に当たった反動で加

速するのかもしれないようだ。多分、やろうと思えば出来るんだろうけど、今の彼には無理な芸当のようだ。

「さて、そろそろ疲れてきたからな。そろそろ終わらせるか」

太郎君は額に流れる汗をぬぐった。太郎君も案外ギリギリなのかもしれない。

「終わらせる前にこれだけはお前に言っておく!!」

太郎君は飛んできたボールを避けながら、言う。

「お前に足りないものは、速さに集中に身長に思考!!　そして何より、礼儀が足りねえええ!!」

まあ、確かに足りないけども……。

「うるせええんだよ、ブアアアアカ!!」

サラマンダー君は叫びながら、ボールを太郎君に向け、飛ばす。

太郎君は動かない。どんどん距離がつまり、今までなら避けたであろう距離までボールがきて、太郎君は動かない。そして　。

「はい、キャッチ」

そしてそのまま、普通にキャッチした。サラマンダー君は、太郎君がどうせ避けるだろうと思っていたのか、それとも頭に血が上り、コントロールを忘れたのかはわからないが、ボールを止めることなく、方向を変えるわけでもなく、そのままボールを真つすぐ飛ばした。ただ真つすぐ飛んでくるボールなら、僕だつてキャッチ出来る。運動が得意な太郎君なら、余裕だろう。

「……え」

「まっ、楽勝だったな」

太郎君はサラマンダー君にボールを投げ返したが、涙や鼻水で大変な事になっている顔のまま固まってしまっているサラマンダー君はキャッチ出来ず、そのまま床を跳ねた。さつきまで、意思を持っているかのようなボールは、ただのボールに戻っている。

「じゃあなサラマンダー。もっと精進しろよ。後、礼儀を知れ。あー、喉かわいた。各務行こうぜー」

呆気ない幕切れだが、勝ち勝ち。 「バカな……」と、呟き固ま

ったままのサラマNDER君に「じゃあね」と言って、僕も太郎君に続き、部屋を出る。

特に意味はないが、部屋から出る時見たタイマーは、残り三分を示していた。

3・超能力娯楽施設（鏡の迷宮）

二人目の四天王、サラマンダー君を太郎君が見事打ち倒し、僕らは四階へ向かった。四階も、三階、二階同様、ドアは一つだけであり、廊下の突き当たりのエレベーターには故障中の貼紙がしてあった。

違う点は、四階のドアに鏡がはめ込まれており、そこにマジックで『このドアをくぐるという事は、あなたの全てを鏡に写させてもらう事に同意した事になります』と、小さな字で書かれていた事だ。『どういう意味だこりゃ』

「さあ、何か能力の使用許可だと思うけど……」
鏡に写させてもらう……改変系統かな。

「ま、入ればわかるか」

太郎君は警戒心零でドアを開け「うお!？」驚いた。
ドアを開けるとそこは、鏡の世界だった。どうやら第三の間は『鏡の迷宮』のようだ。

「はー、こういうの、ミラーハウスってんだっけ？俺、初めて入ったぜ。すげえな」

「そうだね」

太郎君が興味深げに横にある鏡に触った。当然、鏡の中の太郎君も、右手と左手の違いはあれど、同じ動きをする。そしてその後ろには鏡に手をつける太郎君の背中が見え、その向こうにはさらに太郎君が。無限にある太郎君の連鎖は、鏡の中にしかない暗闇へと延々と続いている。

「そついや、合わせ鏡の何番目にかは、死に顔が写ってんじやなかったっけか……」

「そんな噂もあつたね。十三番目くらいじゃなかったかな」

「ああ、やだやだ。気持ち悪い」

太郎君は鏡から手を離し、寒気が走つたように体を震わせた。

他にも鏡にまつわる怖い話は数あるが、この場所なら、それを確かめられそうだ。前後（ドアの後ろは鏡張りだった）左右だけでなく、天井にも鏡が張られている。蛍光灯の近辺と、床にしかコンクリートは見えない。

曇り一つない鏡は身長より高く、だいたい二メートルくらいだろうか。横幅は……。

「これ、一枚じゃないんだ」

「は？マジかよ」

不自然な事に、ここには鏡とコンクリートと蛍光灯、そして自身以外の何も見えなかった。鏡の枠に使われるものも、なかったのだ。普通、鏡を設置する時は枠のようなものがあるはずだが、それが無い。最初は、とても横に長い鏡が一枚あるように見えた程だ。鏡と鏡の境界部分を触ると、若干違和感があった為、複数の鏡が並んでいるのだとわかった。一枚の鏡の横幅は、一メートルもない。床にはめ込まれているのかとも思ったが、違う。天井には届いていない。試しに押してみたが、ビクリともしない。鏡の向こう、見えない部分で支えているのだろうか。もしくは、超能力だろう。

「なんか気持ちわりいとこだな。各務、お前先頭歩いてくんね？」

先頭歩いて、振り返ったらお前いなくなつてたら、マジ怖いから「わかつたよ」

太郎君は、目に見えない恐怖に弱い。太郎君の前でオカルト話をしようものなら、脱兎の如く逃げるか、物理的に話を中断させられる。ボクシングやその能力のため、対人間には強いからこそ、そういう得体の知れないものが苦手なのだろう。

二人並んで歩くには少々狭い、鏡に囲まれた通路を歩く。歩いているうちに気付いたが、この部屋は『合わせ鏡の間』としては成功だが『鏡の迷宮』としては失敗している。

昔、家族旅行でミラーハウスに入った事があるが、ミラーハウスは鏡を不規則に、しかも斜めに設置されているため、どこが通れるのか、どこに鏡があるのかという事がわからなくなり、頭をぶつけたり、道に迷うようになっていた。一緒に入った菜月と、いつの間にかはぐれてしまい、盛大に泣かれたのは、今ではいい思い出だ。

しかしこの場所は、まず鏡が真つすぐ置かれているため、鏡の錯覚が起こらない。そしてそもそも、曲がり角がほとんどない。あったとしても分かれ道でもなく、ただ曲がるだけ。実質一本道だ。

「何なんだこの部屋は。どうすりゃクリア何だよ」
「僕に聞かれてもわからないよ」

この部屋に入り、五分程度経ったが、今だに、この部屋の主（恐らくウンディーネ）の姿は見えない。延々と、鏡に挟まれ歩き続けている。歩き始めた当初は、若干怯えていた太郎君は、すでに怯えではなく苛立ちを感じているようだ。

「つーか、この部屋広くねえか？ 合わせ鏡のせいでそう感じるだけか？」

「いや、多分広いよ。下の階の部屋より広い。気付かない間に僕達と同じ場所を回ってるなら別だけど」

「ハッ、一本道でどう迷えるってんだよ」

太郎君の言う通り、それはありえない。しかしすでに、体感では部屋の中を一周はした気がする。という事は、この部屋は下の階よりだいぶ広いという事になる。

「てか、これ、本当なら階段辺りだろ」
「だね」

方向感覚が狂っていないければ、僕達は階段がある方に歩いている。そしてすでに、部屋の壁にぶつかっていないければならなくらいは歩いた。しかし、曲がってはいない。つまり僕達は、階段があるべき場所を、そしてそろそろビルから出ていなければならぬ場所を歩いている事になる。そんなのはおかしい。という事は。

「超能力か」

「そうだね。接触はされてないから催眠は考えにくいから……空間操作か、空間製作かな」

「干涉系統か、おもしろくなってきたな」

「干涉系統とは限らないけどね。どっちにしても僕は厄介な気がしてきたよ」

楽しそうな太郎君とは対象的に、僕はため息をついた。

超能力『空間操作』『空間製作』この二つは、似ているが、系統が変わってくる。『空間にある物を自由自在に操作する能力』である『空間操作』は、操作・移動系統で、『空間を自由自在に操作する能力』である『空間製作』は、『無機物・目に見えない物に干涉する』能力であるので、干涉系統になる。その違いは微妙でわかりづらい。テストに出ると間違えやすいので、注意が必要である。

今、僕達は『空間を広くする、もしくは広いと錯覚させる能力』を使われている。『目に見えない空間』に干涉して本当に広くしているのなら、干涉系統の『空間製作』だろう。そして、『空間にある鏡』を操作して、僕達が気付かないように同じ場所を歩かせているとしたら、操作・移動系統の『空間操作』になる。ありえないと思うが、方向感覚と距離感覚を狂わせて、広く感じさせてる場合は催眠系統だ。

今回の場合は、鏡をここまで自力で調達したとは思えないので、干涉系統空間製作の可能性が高い。この鏡も、そして階段を塞いでいた鏡も、能力で作りに出したものだろう。『空間を自由自在に操作する』空間製作能力。その能力に色々制限と条件はあるが、厄介な事には変わりはない。干涉系統全般に言える事だが、社会適応難易度が三以下になるのは稀な能力だ。

干涉系統の使用条件は、個人に対する許可ではなく、場所の許可が多い。つまり、ドアの前に書かれていた言葉の意味は、別能力の許可の可能性が高い。

「お」

「ん？」

相手の超能力がわかってきたからといって、どうする事も出来ないで歩き続けていると、前方の鏡に何かあるのが見えた。まだ遠いので読めないが、ドアにあったのと同様、マジックペンで何か書かれているようだ。

「さっさと行こうぜ」

「わかってるよ」

後ろから太郎君に急かされたが、警戒しつつ進んでいくと、やはり文字が書かれていた。そこには『ここから先は、一人と一人に別れて下さい』と書かれていた。小さくて丸い女の子っぽい文字だ。そしてそこは分かれ道だった。右にも左にも行ける。

「ようやく、先に進めるみたいだな。ここからが本番って事か？」

「多分ね」

この部屋に入って、十分弱。ようやく、あちら側からアプローチがあった。この十分に何の意味があったのだろうか。体力を削る以外にも、何かあった場合は厄介だ。時間稼ぎ。準備完了。

「じゃ、頑張れよ各務。また後で会おうぜ」

「そっちもね」

太郎君と軽く拳を当て、別れる。太郎君は左に、僕は右に。

「……」

太郎君と別れ数分。ずっと直進し続ける。静かな中、鏡に、自分に囲まれて歩くというのは、何だか奇妙な気分になる。一人なはずなのに一人とは感じない。しかし、部屋に一人にいるより、強い孤独を感じる。太郎君は大丈夫だろうか。これ、精神的に来るぞ。

そして、その後数回曲がって、『ソレ』が現れた。

そこは通路ではなく、鏡に囲まれた正方形な広場だった。ここだけは、鏡の高さが天井まであった。そして部屋の中央に額縁がある鏡が一つ置かれていた。

その鏡にも、当然、僕が写っていた。その鏡に近づけば、鏡の『僕』も近づいてくる。足を動かせば、足が動き、手が動けば、手が動く。普通だ。何もおかしくない。しかし、どこか違和感がある。

「……ああ、そうか」

違和感の正体はすぐにわかった。逆になっていないのだ。右足を前に出せば、鏡の『僕』も右足を。右手を振れば、鏡の『僕』も右手を振る。

僕がその事に気付き立ち止まると、『僕』はそれに気付いたのか微笑んだ。そして『僕』だけが、僕に近づいてくる。

そして、なんとも表現出来ない、ぬるつとした感じで『僕』が鏡の中から出てきた。『僕』が出てきた鏡には、もう僕の姿はない。

『僕だからもうほとんどわかってると思うけど、一応説明しておくよ』

出てきた『僕』は、当たり前だが、僕と同じ声だった。

『第三の間の相手、ウンディーネさんは多重能力者だ。干渉系統空間製作と、改変系統『模造』^{コピー}。二つの能力を合わせて、彼女の超能力は『鏡の迷宮』ミラービリスンと呼ばれる。そして、この第三の間のクリア条件は、自分自身を倒す事さ』

そして『僕』は、憐れむような顔をしながら、肩をすくめた。僕は『僕』に同情され、嘆息するしかなかった。

僕が入ってきた場所も、いつの間にか鏡で塞がれていた。逃げ道がない。

『逃げ道はないよ。『僕』を倒さないと出られないという趣向さ』

「……そうみたいだね」

仕方なく、僕は『僕』と向かい会う。向かい会うのは別にいいのだ。鏡を見ると変わらない。それは自分自身にしか見えないからだ。

『さて、質問があると思うから、答えようか？』

「……」

問題は、喋るという事だ。喋ると途端、『僕』が僕とは別物に見

える。僕そつくりの別人に見える。僕と同じ顔で同じ姿で同じ声の別人。見ていて気持ちがいいものじゃない。

「君はウンディーネさんの超能力で現れたという事で、いいんだよね」

鏡に寄り掛かりながら、『僕』に尋ねる。

『その通り』

『僕』は腕を組みながら、無愛想に頷いた。僕はいつもあんなに無愛想なのだろうか。神山先輩に鉄仮面と言われても仕方がないなそれはともかく、『あなたの全てを鏡に写させてもらう』とは、こういう事だったのだ。外見だけでなく、中身も鏡に写す。まさに、全てだ。

「君はどこまで、僕なのかな？」

『そうだね。九割方、『僕』は僕だと思ってもらっていい。記憶も性格も、『僕』は僕だ。違いは、ウンディーネさんからの指令と、彼女の情報くらいかな』

「なるほどね。それであんなに、歩かせたわけか」

『その通り』

改変系統『模造』^{コピー}。文字通り、模造品を作り出す能力だ。その多くは物質をコピーする能力だが、人間をコピー出来るのは珍しい。さらに、外見だけでなく内面もコピー出来るなんて、希少価値が高い。使用条件はコピー出来るものによって変わるが、ウンディーネさんのものは恐らく、空間製作の能力と深く関わっているのだろう。『空間製作の使用条件は、その場所の許可を取る事と、一日一時間しか使えない事。模造の使用条件は、対象の個人情報と許可を得る事。空間製作で作り出した鏡に最低でも十分間写す事。そして、出現させる鏡、投射鏡^{とうしゃきょう}は二枚までしか出せない』

『僕』は自分自身が出てきた鏡を叩く。それが投射鏡なのだろう。ここに一枚、もう一枚は太郎君の方か。音が全くしないが、きっと太郎君も今、僕と同じ状況に陥ってるに違いない。

『他にも条件というか、制約があるんだけど、大まかなところはこ

くらいかな。能力は見てわかるように、鏡の迷宮を作り出し、コピーした物に一定の指示を与える事が出来る。社会適応難易度は三」
仕組みがわからない能力だけを見れば、四、五になってもおかしくないと思うが、三という事は、パーソナリティがいいという事だろう。というか。

「そんなにぺらぺら喋っていいのかい？」

この情報は、ウンディーネさんに不利益な気がするのだが、余裕の現れか、実は三つ目の超能力があるのか。それとも……。

『いいんだよ。ウンディーネさんは、まだ超能力をあまりうまくコントロール出来なくてね。一定の指示を与えるんじゃないかと、一定の指示しか与えられないんだ』

それとも、の方だったらしい。サラマンダー君のように、まだコントロールに難があるようだ。もしかしたら、この場所は彼らの練習場でもあるのかもしれない。超能力を使用し、慣れる事がコントロールへの近道だ。

『僕』が指示されているのは、僕と戦うこと。それだけだよ。それ以外は、全て『僕』に一任されている。その意味が、僕ならわかるだろ？』

そう言つて、『僕』は意味深に微笑んだ。僕はそれに頷く。『僕の言いたい事はよくわかる。』

よく、自分を一番知らないのは自分自身だと言う。そのためか、創作物の多くでは、鏡から出てくるもう一人の自分が、自分に似ても似つかない、自分とは真逆な存在である場合が多い。しかし、今回の場合は違う。『僕』は別に、僕の影というわけではない。『僕』と僕は、外見だけでなく内面も同じなのだ。僕は『僕』だ。僕ほど『僕』を知るものはいないし、『僕』ほど僕を知るものはいない。僕が知っている僕自身の事は、『僕』も知っていて、僕が知らない僕自身の事は、『僕』も知らない。

だから、僕が今考えてる事が、『僕』が考えている事だ。僕が『僕』の立場だったら考える事を、考えればいい。『僕』は、僕が『

『僕の立場になった場合を考えるだろうと考えたはずだ。考えた上で、さっきの話をしたのだ。』僕の立場は、『ウンディーネさんに、僕と戦うという指示をされた』という物だ。ポイントは、戦うという指示しかされていないという事だ。そしてそれに、僕のパートナーティと今の状況を加味すれば、『僕』がいたい事が、^{おの}自ずとわかる。

『準備はいいかい？』

僕が、この場を切り抜ける方法をまとめ終わるか否かというところで、『僕』が聞いてきた。僕が答えを出した事が『僕』だからわかったのだろう。僕は「ああ、大丈夫だ」と、答える。

『それじゃあ、勝負の方法は』

「ちよつと待て」

『なんだい？』

「僕はどんな勝負でも暴力を振るう。痛い目を見たくなかったら、負けを認める」

『痛い目を見るのは嫌だな。わかった。』僕は負けを認める』

『僕は両手を上げて、負けを認めた。その顔に、悔しさの色は全くない。』

何故なら『僕』が指示されたのは勝負をする事だけで、勝てと指示はされていないからだ。その上、『僕』は痛い目を見るのが嫌いだ。さらに、『僕』は面倒な事が嫌いだ。そして、『僕』はこの先に興味がある。しかし、行けるのは僕だけだ。だから、『僕』は暴力を振るうと脅せば、それが嘘だとわかっていても、あつさり負けを認める。『僕』には、最初から勝つ気はなかったのだ。

ああ、全くこれは。

「『茶番だね』」

僕と『僕』は、鏡写しのように、肩を竦めた。

『それじゃあ『僕』は早々に消えるよ。あまりいて、気持ちがいいものではないだろ？ 太郎君の方が終わったら出れるから、じゃ、またね』

そう言つて、『僕』は投射鏡の中に戻っていた。投射鏡に入ってから、一度手を振ると、投射鏡ごと『僕』は消えた。フツと、レポートしたように一瞬にして。それを見て僕は、鏡に寄り掛かるのをやめた。

一人になつた僕は、鞆から携帯を取り出し、太郎君の方が終わるまで時間をつぶす事にした。菜月から『お腹空いた』。まだ帰つてこないの？ 今どこ？ 菜月寂しくて泣いちゃう』というメールが来てたので、『今は駅前。もうすぐ帰る』と返しておく。

「……思つたより早かつたね」

メールを返してからしばらくして、唐突に周りの鏡が全て消え、二階と三階と同じコンクリートの部屋に戻った。僕が『僕』に勝つてから、まだ五分も経っていない。

「太郎君」

「……各務か」

僕は部屋の中央で、四つん這い状態の太郎君に近づき声をかけた。見るからに落ち込んでいた。

「……やっぱり、負けたんだね」

「……クソがあああ！！」

やはり負けたらしい。太郎君は、コンクリートに拳をたたき付け、悔しがっている。

「自分自身にどうやって勝てばいいってんだよー！！」

思っていた通り、そういう迷宮にはまり込んだらしい。太郎君らしい、失敗だ。古今東西、勇者、つまり主人公達は自分自身との戦いを強いられ、苦戦する運命にある。勇者に憧れる太郎君は、見事にそれにやられたようだ。

太郎君のフィクションは、『相手より自分が強い』と思わなければ使えない。今回の相手は『自分』だ。自分は、自分自身より強いと言えるだろうか。太郎君はきつと、そんな疑問を持っただろう。持った時点で、太郎君のフィクションは使えない。

瞬発力強化も、メンタルに深く関わってくる。『自分に出来る』というイメージが強ければ強いほど、能力は上がる。その逆もまたしかり。

「どうやったところで、自分なんて引き分けにしか出来ねえだろうがー!!」

第三の間は、肉体的な強さより、精神的な強さが重要だった。太郎君はまだまだ、精進が足りないようだ。

僕は悔しがる太郎君を慰めながら、四天王の館を後にし、お腹を空かせる菜月が待つ家へ急いだ。

『僕』が言った通り、明日も僕は『僕』に会う事になるだろうなあと思いつながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2579s/>

超能力は、好きですか？

2011年10月6日03時12分発行